

計画・交通 研究会会報

[特別号]

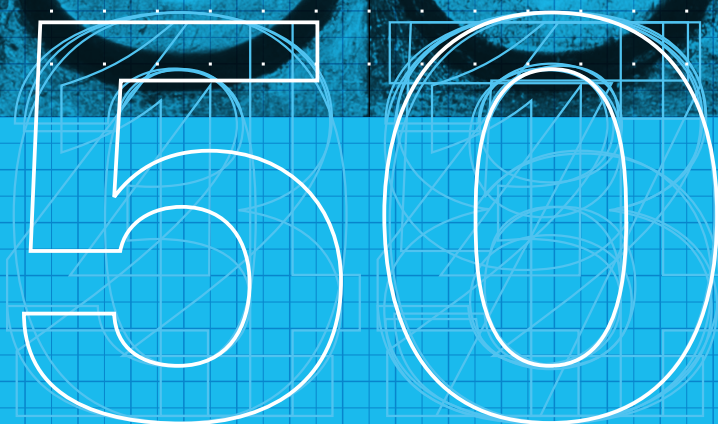
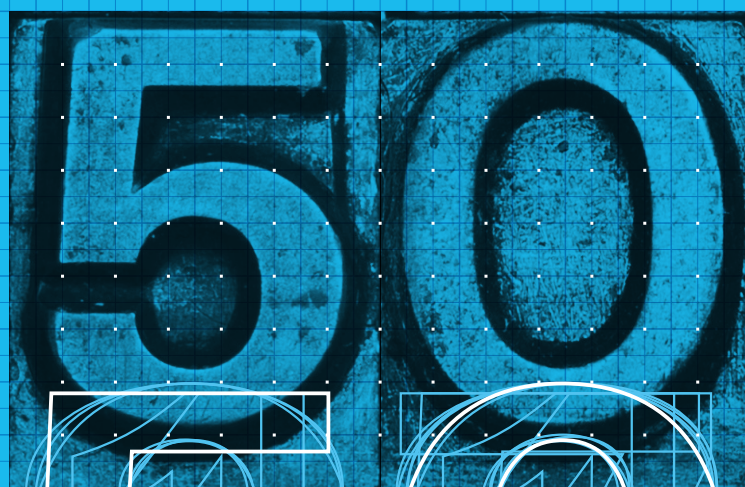
Association for
Planning and
Transportation
Studies

Special Issue

2024
[Jul.] 07

発行日：
令和6年7月11日
発行：
(一社)計画・交通研究会

Yoshinosuke YASOSHIMA · Hideo NAKAMURA · Takeshi
KUROKAWA · Shigeru MORICHI · Hitoshi IEDA · Eiji HATO



1974—2024

計|画|・|交|通|研|究|会| |設|立|5|0|周|年|

50th ANNIVERSARY



初代——八十島義之助

元帝京技術科学大学学長・
東京大学名誉教授

01

Yoshinosuke
YASOSHIMA

1978.01.19–1998.05.09

ご挨拶

Greeting

第2代——中村英夫

建設コンサルタント協会顧問・東京都市大学名誉総長



1998.07.07–2004.05.26

Hideo
NAKAMURA

02

第3代——黒川 洸

元一般財団法人計量計画研究所会長



Takeshi
KUROKAWA

03

2004.05.26–2008.04.22

計画・交通研究会の設立から半世紀になりますが、その当時から、国土、交通、計画にご尽力いただいた方々とともに、50周年を迎えることができ、大変嬉しく思います。

八十島義之助先生、中村英夫先生、黒川洸先生、森地茂先生、家田仁先生が会長として、さまざまな企業会員、学識の会員の方々との交流をリードしてきたのは、当研究会でこそと考えております。

中村英夫先生が土木学会会長を務めていた際に阪神・淡路大震災に遭い、森地茂先生や家田仁先生らが分科横断的に危機に臨むことをされておりますが、当研究会は、危機に対して未分化な状態で考えることができる集団、自身の専門分野でないから知らないと言うのではなく災害現場で困っている人たちがいたら、分野を超えて何かやろうと頑張ることができる、危機のリアリティをもてる集団であると思っています。

今現在、ウクライナ危機、ガザ地区の問題、コロナウイルス感染症など、さまざまな世界的な情勢の変化を迎えています。格差が広がっている中、国内で人口が減少していく中、未曾有の危機が迫る中、変化を望まない私たちの深層意識の中、これらに対峙していけるか、格差をなくすためにインフラはあるべきという揺るがない信念を持ち、豊かな国土の実現に向けて、会員の皆さん、これからの若い人たちとともにこれからも歩んでいきたい、一緒に創っていきたくて考えています。

第6代会長 羽藤英二

歴代会長が牽引し、 つないできた50年

計画・交通研究会は、1974年に計画・交通研究懇談会として設立されました。1978年に現在の名称に改められ、2009年に一般社団法人化しています。現在まで6人の会長によって牽引され、皆様のご協力をいただきながら講演会やセミナー、見学会など積極的な活動の続け、本年4月23日には設立50周年記念講演会を開催いたしました。本号では、社団法人化以降の資料も合わせて掲載していますので、ぜひご覧ください。

2008.04.22–2013.05.15

04 Shigeru MORICHI



第4代——森地 茂

政策研究大学院大学名誉教授

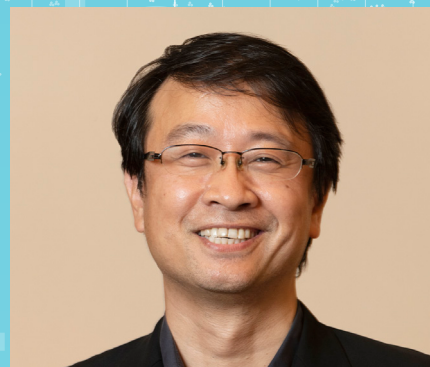
2013.05.15–2021.04.22

05 Hitoshi IEDA



第5代——家田 仁

政策研究大学院大学特別教授



第6代——羽藤英二

東京大学教授

Eiji HATO 06

2021.04.22–



Discussion

地域と文化

Region × Culture



國學院大學
観光まちづくり学部長

西村幸夫

東京藝術大学 准教授
アートプロデューサー

相馬千秋

司会
東京理科大学 教授

伊藤香織

(当会理事)

文責
作家/エッセイスト

茶木 環 (広報委員長)

文責
東日本旅客鉄道

貴志法晃 (広報委員会副幹事長)

撮影 大村拓也

当研究会のセミナーや見学会では大都市の再開発やビッグプロジェクトをテーマに取り上げる一方で、2022年度より地域問題小研究会を設置するなど、日本各地の価値や課題を考える機会を設けています。ここではまちづくりや芸術活動を通じて地域に携わる方々に「地域と文化」について語っていただきました。

地域から発見し、学ぶ

伊藤 パンデミックを経ても、東京一極集中のトレンドは大きく変わっていないように見えます。さらに、交通と流通の発展によって、生活の均質化や文化のコモディティー化も進んでいるように感じられます。

一方で、デジタル化が進む中でオンラインでできることが増えて地域で新しい生活の可能性が謳われたり、オンラインでできることが分かった反面、リアルなものの価値や地域ごとの違いの価値が高まったようにも思われます。地域ごとの違いについては特に「文化」の側面が重要になってきているかと思います。まずは自己紹介も兼ねて、これまで携わってこられた地域と文化に関わるプロジェクトや研究を教えてくださいませんか。

西村 僕はまちづくりと都市計画が専門です。ちょうど高度成長期に教育を受けて、大都市の再開発などビッグプロジェクトが多かったのです

が、僕自身は都市が持っている独自の個性を大事にする計画を目指して、小さい町並みの調査などから面白そうな地域の個性を見つけて、それを伸ばしていこうと考えていました。

最初に手掛けたのは福井県の小浜から京都に行く鯖街道の宿場町熊川宿で、当時は宿場町に店舗もほとんどない状態で空き家が多くありましたが、最近では移住してきた人たちがそうした空き家でコワーキングスペースを始めたり、お店も増えてすごく元気になってきています。また、岐阜の高山の近くにある古川というまちでは、高山祭りに似たような古川祭りが毎年行われていて、とても盛り上がります。山車を曳いて廻る屋台組がいくつもあって競い合う。そのために子どもたちが何か月も前から笛・太鼓を稽古する。「みんなと一緒にやる」ことが鍛えられているから、まちに元気があるんです。

そういうまちを見てきて、共有できるものがあるというのはすごい力になると感じていて、まちづくりも、地域にとって「自分たちが守っているものはこれだよね」と共有して、皆が同じ方向を向けるものを探していった、そこから積んでいくという方法論でやってきました。

興味深い年中行事を行っているところがたくさんあって、例えば高山市の山間の集落では元日に歳旦祭が行われます。村の鎮守である神社で行われる儀式が終わるまで他の人と話してはいけない。儀式が終わると自由にな



福井県若狭町熊川宿のイベント「いっぶく時代村」の様子。ここまで再生されるのに30年くらいかかっている

り、一年が始まる。それがこの地域の風習となっているのですが、高山市役所の人も知らないような限られた地域のしきたりのようです。

冬が長い北の地域では、春になると様々な花が一斉に咲くので、それはその地域にとっては心が躍るような大きな出来事なんですね。岩手県の山間部で人々がそれを本当に嬉しそうに語り合うのを聞いていると、浮き立つような喜びを感じられますね。

相馬 私はアートプロデュースを手掛けていますが、いま西村先生のお話をお伺いし、ここ20年ぐらい自分も含め多くのアートプロデューサーの活動の場は「お祭り」だったんだなあと思いました。地域に根ざしたお祭りというよりはアートフェスティバルというかたちですが、フェスティバルがアートのプロジェクトを企画し、実現するプラットフォームとして機能してきたことは間違いない現象だと思います。

私が近年、都市部以外の地域で力を入れてきたプロジェクトは「みちのくアート巡礼キャンプ」という移動型のワークショップです。震災後、民族学者の赤坂憲雄先生とともに立ち上げ、毎年夏に開催してきました。巨大なカストロフに見舞われた「みちのく」、つまり「道の奥」として中央から名指されてきた地で、芸術を媒介に何ができるのか。この問いに対して赤坂先生からいただいたキーワードが「巡礼」でした。鎮魂や再生を目的とした「巡礼」の旅の身振りを模倣し、地域を一か月、リサーチ、対話、ワークショップを組み合わせてながら集団で移動していきます。参加者は10～15人ぐらいで、狭い意味のアーティストだけではなく、何か言葉にならないものを

形にしたいという人たちです。最初は皆で4泊5日の移動型の合宿をして、その土地の活動家たちはもちろん、哲学者、人類学者、芸術家、精神科医などのゲストと対話をし、その後、個人個人が自分のテーマに応じてリサーチの旅に出ます。最後にもう一度皆で集まり、自分の旅の中で経験したことをシェアして、そこから未来のプロジェクトを構想していきます。プランの実装自体は5年かかっても10年かかってもいい。自分が身体的に経験した震災後の「みちのく」という場所から自らの問いを立て、それを未来に向けて投げかける発表を行います。

初年度は福島、翌年は宮城、その次は岩手と被災地を巡りましたが、その後は秋田でも展開していきました。アートコンテンツを地方にもって行って被災地を支援しようという考え方ではなく、私たちが被災地や東北にお邪魔し、その土地の歴史や人々の声を聞くことで学ばせていただく、というのが基本姿勢です。キャンプの参加者がその行為の主体となり、自らの身体とともにある土地を移動することがクリエイティビティに結びついていくような、そういうモデルを開発してきました。

伊藤 地域から学び、吸収するわけですけど、人によってその表出・表現が全く違ったりするのでしょうか。

相馬 参加者の中には、震災後すぐ動ける人だけではなくて、なかなか動けない人もいて、その時間のズレや躊躇いみたいなものもアートの原動力として非常に重要だと思っています。参加者の中には、震災当時は



みちのくアート巡礼キャンプ2016 宮城県南三陸町でのフィールドワークの様子

まだ子供で言葉にできなかった思いを抱えつつ、地元に残って活動している方も複数いました。たとえば、宮城県出身の佐竹真紀子さんは美大時代に震災に遭遇しました。震災直後は何をしていいか分からなくて、衝動的に偽のバス停を自作し、それを何もなくなってしまった荒浜地区に仮設して、そこで来る日も来る日も何かを待っていたそうです。その後彼女は、みちのくアート巡礼キャンプに参加し、いろんな人の意見を聞きながら、プランをブラッシュアップしていきました。その1年後には、本当に荒浜地区で「思い出バスツアー」を実現するに至ります。実際に市バスを借り上げて、偽のバス停を設置し、荒浜にかつて住んでいた地域住民の方を招きました。かつてのルートに従って走るバスの中では、「次は〇〇です」というアナウンスも流れますが、そこにはもう町も人々の営みもありません。しかし乗客はかつてバスに乗るという日常の模倣から記憶を再生し、再びコミュニティや土地との繋がりを回復するのです。こうした企画を、行政ではなくて、そこに何か思いがある1アーティストがやることで、皆が応援して実現したのだと思います。それは一人のアーティストが主導するアー

トプロジェクトであると同時に、地域にとってはコミュニティの再生であり、外からの人にとっては観光ツアーのようなものかもしれませんが、そのどれもが成立していることに意義があると思います。

地域の可能性はどの部分にあるか

伊藤 お二方のバックグラウンドは異なるのですが、地域から学ぶというところは共通していると思いました。東京一極集中がどんどん進んでいる中で、地域の可能性や重要性についてどういうふうにお考えでしょうか。

西村 日本全体を見ると、さまざまな生き方や暮らしがある。ところが、大都市の生活のあり方ってだんだん同じような感じになってきて、外の世界ではいろんなことがあることを忘れちゃうんですね。

自然との関わりだって、たとえば東京の都心で彼岸花が見られる場所は皇居の周りぐらいです。でも田舎に行くと、あちこちで咲いている。



伊藤香織 東京理科大学 教授(司会 当会理事)

それを見ると、季節や生活、それと行事などいろんなものが重なっていて、そういう豊かさがあるんです。

そういう意味で本来は多様な生活が日本中にあるはずなのに、我々が日常の生活だとイメージしているものは「大都市の定型的なもの」で、それがスタンダードになってしまうのはあまりにももったいないんじゃないか。多様なものがあることがやっぱり強いんだと思うんですね。

パンデミックで制限がたくさんあったけれど、ローカルツーリズムでの発見もあったと思います。そんな時、地元にも多様なものがあるということを知ることはすごく強いと思うんですね。そういう発見はきちんと大事にしていかなないとだめだと思いますね。

伊藤 私はずっと東京なので、いろいろな地域に行ってはその豊かさを感じるんですが、それはオリエンタリズムのようなある種の消費的な態度なんじゃないかと少し反省することもあります。私はそこで耕したりしながらその景観をつくっているわけではなく、外から行って違いの豊かさを享受して楽しんでいるので、フリーライダーなのではないかと感じたりもするのです。

一方で地元の方は、やはりナショナルチェーンのお店が来てくれたら便利だし、リモートワークのようにどこにいても同じように働けることの魅力はわかるのですが、利便性を求めていくと、均質化したり、似てくる部分があると思います。その中で、多様なものが多様なままでいられるんでしょうか。

西村 消費文化の社会では、車で少し移動すれば都会に行けるので、目の前にはなくても、全く接点がない



西村幸夫 國學院大學 観光まちづくり学部長

ということは少ないと思うんですよ。モビリティが上がっているのでも、その意味ではいろんな可能性が増えてくる。そこに交通は関係してくる。一方で、ちょっとした生活の中の景色や他にはない独特のものは地元では当たり前になってしまっていて見つけにくいわけですよ。

相対的な目をどういうふうに持てるかにかかっていると思うんです。われわれはせめてその媒介者になって「これはすごい」と言い、地域の人は「あ、なるほど。そういうふうと思うんだね」と思ってくれる。そういう立場・役割があるのかなと思いますね。

相馬 私たちは一般的に大都市が交通の起点でそこから同心円状に地方に交通網が分散していくイメージを共有しているわけですが、実際には、大都市と地方はきっぱり別れているものではなく、グラデーションのようにずっと続いて広がっているものではないかと思っています。

例えば、私が教えている東京藝術大学の一部は取手であって、駅前は

ちょっとした市街地で西友やスタバもあるけれど、でも2〜3分歩くと畑も利根川の河川敷があり、高齢化や人口減少の課題もある一方、藝大生や留学生も多数住んでいる。ここは地方なのか、都市なのか、農村なのかという、区分けが難しい地域がだらだら続いている。これが日本の大部分の実態かもしれない、そういうところにも何かフラグを立てるような機能がアートにはあるのではと思います。

私は演劇が専門なので、演劇と移動がどのように日本の文学的想像力に関わってきたかにも興味があります。例えば日本最古の演劇であるお能では、多くの謡曲が、旅の物語なんです。ワキ役は大体僧侶か旅人で、旅先で見知らぬ人物に出会います。その人物(シテ役)はどうも様子がおかしい。「どうしたんですか」と聞くと、「実はこの土地では過去にこんなことがあって、私はそのトラウマを抱えているのです」と言って幽霊として再登場し、その成仏できない思いを謡い、舞う、というのが夢幻能の形式なんですね。つまり能のドラマツルギーは、移動することで普段見えていない他者と出会うことから発生します。昔の人も移動して旅して、何かときめいて歌を詠んだり物語を作ったりしたわけですが、それはさっき西村先生がおっしゃった多様性とほぼ同じことで、地元の人には何でもないことでも、外から来たよそ者にはときめく対象となる。地元が見せたいものとよそ者がときめくものはズレている場合も多いけれど、今も昔もアートはそこに、何かしら時代を超えて人々の想像力を刺激するフラグを立てることができるものだと思います。

西村 「瀬戸内芸術祭」のようなアートでの地域おこしも、場所をアーティストが開拓し直して、自分の形で表現する。そのアーティストにとっては、その地域、環境があるから、そういう表現が生まれてくると思うんだけど、地域の人にとってもある意味、異質なものに見えて、地元が今までとは違う見え方をする。その面白さがあると思うんですね。

相馬 私は同業者として北川フラムさんを大先輩としてとても尊敬しているのですが、彼は2000年に越後妻有で芸術祭を興し、さらに2010年からは瀬戸内芸術祭も手掛け、地域振興と観光とアートが結びつく一大パラダイム転換が起きました。その後、全国各地で多くの類似するアートイベントが展開するようになりました。その背景にはここ15年ほどの国の文化政策もありました。アートプロジェクトを主催する自治体が経費の半分を出せば残りの半分は国が補填するという補助金の枠組が文化庁にでき、飛躍的に自治体主導のイベントが増えました。また2018年には国際的なフェスティバルを推進する「国際文化祭典法」、2020年には文化と観光を結びつける「文化観光推進法」が制定され、国策としても地域アートが推進されているという背景があります。

こうした政策に後押しされて、ここ数年で成果をあげている地域がある一方、それがそのままやっていって持続的に発展できるかというと、地域の衰退スピードも早く、コロナで淘汰されたところも多く、必ずしも「地域とアート」を観光と結びつけてやればどこも成功する訳ではないでしょう。

伊藤 都市計画でもそうですが、最

初は高い志や理念があって、その場所のことをその場所の人が考えようとか、そういうところから始まって、あつと言う間にマニュアル化されていきます。



相馬千秋 東京藝術大学 准教授・アートプロデューサー

地域に入っているいろいろなものに出会っていく、あるいはすれ違っていき、いろんな時代のものを生み出していくことは、西村先生が手掛けてこられたまちづくりにも重なる部分があると思います。時代やジャンルにかかわらず、手がかりとしていろいろなものを見出していかれるわけですね。それをどう活かしていくのかも、いろいろな手法があるかと思っています。

西村 まちごとに個性が違うので、何をやっていいというマニュアルがあるわけではない。まずは歴史を勉強することが大事で、このまちがどのような変遷をたどってきたか、古い地図や写真を見て、そこからいろいろな話を聞いて、いろいろ考えていく中で、ここまでのまちの物語が大体見えてくる。

もう1つは、まちは自然に形成されたように見えるけど、それぞれの時代に積極的に意図的に何かやろうと志を持ってやった人が、すごい苦労して志半ばだったり、図らずも成功したりするんだけど、そういうものの蓄積なんですね。ストーリーが見えてくると、その先に何があったらいいのか、次の世代に何を引き渡したらいいのかみたいな感じで考えると考えやすい。

確実に成功を保証することはなかなか難しいけれど、「これはおかしい」というのが削除されて方向感覚が研ぎ澄まされていくと、「このまちの進むところは、あ、こっちだよ」と見えてくる。僕はそういう大きな流れをつくって、そこに地元の人の協力ができればいいと思っています。みんな合意できるんですね。建築家やアーティストとは違って、僕は黒子であって、後は消えていくのがいいですね(笑)。

大都市やアジアとの関係性から 地域をみる

伊藤 地方は、大都市との関係においても存在していると思うんです。地方と呼ばれることもあるような各地域と大都市とのこれからの関係について、改めてつながり方や関係についてお考えがあればお聞かせください。

相馬 大都市ということかというと、私は今、2027年にオープン予定の「港区立みなと芸術センター」計画に参加として関わっています。場所は世界貿易センタービル跡地で、浜松町駅直結、つまりモノレールに乗れば羽田空港から15分、新幹線が止まる品川駅や東京駅からも10分と、極

めてアクセスのよい大都市ならではの立地にあります。

劇場のプランを考えることはその劇場が根差す都市について考えることでもあるわけですが、浜松町を起点とした大都市・東京から見た「地方」はどこか？と考えると、それは日本全国に広がる諸地域であると同時に、アジアの様々な都市や地域にも広がっているイメージを持っています。

以前行ったシンポジウムで、羽藤英二先生がこれから30年の間にアジアの人口が今より10億人増え、羽田空港や品川周辺はアジアからの移民や観光客のゲートウェイとしての機能を求められるだろうとおっしゃっていました。私自身、東京藝大で教えていると、アジアからの留学生の数の多さやその存在感に圧倒されるのですが、彼らはまさにアジア中のいろんな「地方」からきているんです。ですので私の体感では、「地方」は今や国内だけでなく、中国や韓国、台湾、東南アジアの諸地域までもが含まれてくる感じがあります。日本における「中央—地方」という軸ではなく、アジアに広がる時間軸も空間軸もばらばらな小都市・諸地域との繋がりの中から東京を捉えたほうが面白いし、東京の新しい未来像みたいなものが見えるのではないかと思います。

西村 地方にも都会にもたくさん空き家があって、その問題が大きいんだけど、都会の人たちは各地域に、都市部ではない地域に住む人は都会にセカンドハウスを持てばいいと思っています。そうすることで第二の故郷を持つことになる。一人で持たなくても何人かだと持てるかもしれない。全国各地域で、消滅可能

性都市みたいに言われているところのほうが都会との差異が大きくて、生活の中で発見や気づきが大きくなる。そういうふうにと考えると面白い二重生活ができいくかと思います。

日本では別荘は富裕層が所有するものというイメージがありますが、ロシアとか北欧の人は普通の人々が別荘を持って、寒い時期には南で暮らしたりしている。日本も普通の生活の中に都会と田舎というのが共存できるような仕組みができ上がっていくと、お互いの応援団にもなるし、すごく面白いことが起きるんじゃないかな。その中にアジアの人が入ってもいいかもしれない。そうするともっともっと面白いことが起きるかもしれません。

空き家問題の根底には先祖の代からずっと住んできた家を他人に譲り渡すのはよくないという意識があります。だったら年に1回か2回は使って、あとの10か月は貸したりして誰かに使ってもらう。所有の観念をもうちょっと緩く考えていけば、できない話でもないと思うんですよ。そういう意味ではいまちょうど昔からの価値観が変わってくるところじゃないかと感じています。

伊藤 お二方のご経験から、地域の多様性についてお話いただきました。また、「移動」することによって、多様性に出会い想像力を刺激することや、内側からも自らの地域性の発見につながるといったお話からは、地域・文化・交通の関係があらためて再認識できました。それぞれの地域に目を凝らし耳を澄ますことで、人のクリエイティビティを育み、地域の未来を築いていくことが重要であるかと思います。ありがとうございました。

[座談会—2]

歴代幹事による 座談会

Discussion 2

文責 東急電鉄

梶谷俊夫 (広報委員)

文責 東武鉄道

高山滉平 (広報委員)



東京理科大学
教授

日本大学
教授

東日本旅客鉄道(株)
建設工部
企画ユニットリーダー

清水建設(株)
土木営業本部
副本部長

司会
東京理科大学
准教授

計画・交通研究会
事務局長

寺部慎太郎 (元幹事長)
Shintaro TERABE

金子雄一郎 (前幹事長)
Yuichiro KANEKO

下大園浩 (企画委員[取材時])
Hiroshi SHIMOOZONO

王尾英明 (企画委員)
Hideaki OBI

柳沼秀樹 (当会幹事長)
Hideki YAGINUMA

白木原隆雄
Takao SHIRAKIHARA

幹事長として

司会 (柳沼) 最初に歴代幹事長の寺部先生と金子先生は、計交研をこれまでどのような会ととらえて、活動されてきたのでしょうか。

寺部 実務の人とのつながり、都市と交通に関わる業界の人たちが集まる会なので、見学会やイブニングセミナーの後の懇親会の際は、色々な人と話ができて「最近はどうな仕事やっているのですか」「現在推進しているプロジェクトは何ですか」などと聞いて、自分自身勉強する会でした。同時に業界の皆さんをつなぐ機会があるとも思いました。私が幹事長になる以前は、ゼネコンと鉄道事業者がメジャーな会員でしたけど、家田会長の下、それ以外に広がった時期でしたので、面白かったですね。

金子 私が当会の会員になったのは大学に赴任した2006年です。当時は岩倉先生や岡本先生が幹事をされていて、何回か見学会や講演会に参加させていただきましたが、“企業の幹部の方が集まる会”という印象でした。もともと計交研は、国土やインフラに関する個人、企業・団体の方々の交流の場ということで始まっ

ていますが、大学にいと企業の方とお話しする機会はなかなかないので、貴重な経験でした。その後幹事になり、見学会やセミナーの企画にも携わるようになりました。準備など大変なところもありますが、自身の知識が深まり交流も広がりますし、とても良かったと思っています。2020年に寺部先生の後の幹事長になりましたが、会の活動も活発化していましたので「しっかり務めなければ」と思っていた矢先、新型コロナの流行が始まりました。コロナ禍においても、会員の皆様に役立つ企画を可能な限り実施していくという方針の下、活動を停滞させないという強い意志でセミナーのオンライン化やハイブリッド化に取り組みしましたが、結構苦勞しました。白木原事務局長をはじめ、石坂先生や柳沼先生ら幹事の皆さんのサポートのお陰で、無事開催できたというところです。

印象に残っている見学会・セミナー

司会 多くのセミナーや見学会を開催してきたわけですが、皆さんが特に印象に残ったものを聞かせてください。

下大園 私は2015年から会報の編集

委員を務め、企画委員会に入っしたのは2017年で、もう7年のキャリアになります。もともと計交研は、鉄道と建設会社を中心としたハード志向の研究会というイメージがあったのですが、「会員が来ないので、もっとソフトなことをやろう」と家田先生がしょっちゅうおっしゃっていた記憶があります。私が企画委員会に入る前の現地見学会では、愛知県豊田のまちづくり、NEXCO中日本の研修施設を見て、最後に介助犬の施設に行きました。前段のイブニングセミナーで、介助犬の育成・普及をさ



寺部慎太郎 東京理科大学 教授 (元幹事長)

れている高柳先生が講義に來られて、犬連れてとにかく楽しそうで、その続きで現地見学があり、「こういう企画ってすごいなあ」ととても印象に残っております。内容も鉄道事業者が取り組まねばならないことですが、当時としては、取り上げるのが早かったと思います。そういう意味で非常に勉強になったという記憶はありますね。企画委員会に入ってから、首都高の老朽化や、宇都宮LRTの開業前の工事現場を見学させていただいたり、最近ではJR東海さんをお願いして、「リニアの工事ってみんな知らないから、知ってもらったほうがいいのではないですか」と言ったら、東海さんも「ぜひやりましょう」ということになって、橋本の駅とか途中の立坑をたどりながら、最終的に巨大な開口部を見に行くツアーを企画させていただいたり、それなりに時代の早い段階で色々なことに取り組んでいるのがこの会の面白いところと感じています。

王尾 私は2009年から計交研に関わっています。最初は編集委員を務めました。最初は編集委員を務めましたが、会員数を増やすため、会員サービスを高める施策の一環として、会報やイベントの充実を図ろうとした時期でした。色々な企画、各企業からの話やプロジェクト紹介などの話が立ち上がり、その当時の編集委員は日比野委員長を含め4～5人でしたので、てんてこ舞いでした。今の会報の充実度に比べたらそれほどではないのですが、かなり苦労したのは覚えております。その後、企画委員会に移りましたが、一番印象に残っているのは、中部電力の水野社長(当時)のイブニングセミナーです。東日本大震災が起きた後、我が国のエネルギーをどうするかが非常



金子雄一郎 日本大学 教授(前幹事長)

に問題になっていた時期で、聴衆も大変多かったと記憶しています。その当時原子力に対して厳しい世論がある中、公には話しづらいことも、計交研というクローズの会であったので、かなり踏み込んでお話いただきました。水野さんは土木出身でしたが、エネルギーの安定供給に係るベストミックスなどの話もされていて、「原子力は今こうだけど、やっぱり必要だよ」という話を当時されていたのは本当に印象に残っています。その後、九州でも見学会を行い、それがまた「エネルギーの現在・過去・未来」の話でした。大牟田の三井三池炭鉱跡地で過去のエネルギーの話を聞き、その後、日田市のバイオマス発電、九重の地熱発電、風力発電で未来を見て、最後は今のエネルギーであるLNG発電を大分で見学しました。日本のエネルギーの変遷を、移動しながら確認する企画で、素晴らしい企画だと感じた記憶があります。他にも、下北半島の原子力施設の見学会も、原子力を受け入れるを得なかった背景や、下北半島の開拓の歴史の話も含めたプログラ

ムで印象深いものでした。ただプロジェクトを見るだけでなく、歴史や文化等を踏まえた企画ができれば良いと思います。

寺部 高輪ゲートウェイと虎ノ門ヒルズの現場が印象深く、まちが変わっていくところを間近で見られるのはすごく良いチャンスでしたよね。高輪ゲートウェイでは、線路と線路の間を歩いて、新しい駅へ入っていく。虎ノ門ヒルズも地下の現場の細い狭いところに入って「やっぱり土木大変だなあ」とか。それが、今きれいになっていて「そういえばつくっているとき来た」と言えるし、そういう身近なプロジェクトの建設現場へ行くのはすごく印象に残りました。自分で見ていると、学生たちにも自分の言葉で語れますよね。「君らこういう仕事をするのだけ。すごく大変だけど、面白いよ」とそれが大きいのですよ。間違いなく言えますからね、それで興味持ってそういう業界に学生に入ってもらえる。

金子 セミナーに関しては、下大蘭さんや王尾さんがおっしゃったように、幅広い視点から時宜を得たテーマと登壇者について、企画委員会で十分議論して決めています。羽藤会長の意向で、文化的なテーマも取り上げていこうということで、例えば「浮世絵から江戸の土木を読み解く100万都市・江戸の成り立ち」という、これは企画委員の布施先生が提案された大変興味深い企画でしたが、このような内容のセミナーが開催されていることも特長であると思います。見学会については、私が最初に企画に関わったのが2012年の熊野地方(奈良・和歌山)の見学会でして、前年の台風12号により大規模な土砂災害や河川氾濫が発生した地域

を訪問し、高規格道路や堤防、砂防施設などのインフラの重要性を強く認識しました。また、世界遺産にも登録されている熊野古道を歩いたことも、印象に残っています。

白木原 私が計交研の事務局長となったのは2020年4月です。コロナ禍となり、イブニングセミナーを初めてオンラインで行い、その後しばらくオンラインでの開催が続きました。対面も取り入れた本格的なハイブリッドになったのが2023年2月の東大でのセミナーで、懇親会も行いました。皆さんのお話をずっと聞いていて思ったのは、懇親会での意見交換はすごく大事だということです。学の世界の人は企業会員と話し、逆に企業会員の方は学の先生と情報交流してトレンドをつかもうと。下大蘭さんが企画されたりニア見学会はセミナーと連動して、セットとしての価値が高かった。他に印象に残っているのが、王尾さんが企画された東北見学会。それ以降、どんどん企画のレベルが上がっていることを感じます。昨年6月の札幌見



下大蘭浩 東日本旅客鉄道(株) 建設工事事務企画ユニットリーダー(企画委員[取材時])

学会も、ドーコンさんが全精力を傾けていただき、現場視察、ミニ講演会等よかったですね。王尾さんと布施先生が企画した「建設技術のこれまでの50年とこれからの50年」も充実した内容でした。本当に皆さん頑張っていて、事務局はそれを支える立場ですけれども、支え甲斐があるセミナーと見学会になっています。今後ともよろしくお願いします。

司会 私が印象に残っているのは地域問題小研究会で、あえて地域を指定して深掘するところ、すごく面白いと思っています。北海道は2回、沖縄は1回行っていますが、毎回、知ってはいてもちゃんと分かってなかったことをしっかり教えていただけるものになっています。例えば、基地の話等、半分驚きをもって聞くこともありました。レベルがどんどん上がっていることで、より高い会員サービスになっていると思った次第です。

企画者として考えてきたこと

司会 続いて、どのような思いを持って企画を立てているのかお聞かせください。

下大蘭 当初は「皆さんが来くなるように」「交通等のハード整備に偏らないように」という直接的なところから入りましたが、後々振り返ってみると、皆さんの関心が高いのは「まだやってないこと」で、だからこそ早いことに取り組んできたという結果なのではと思います。そういう意味では、色々なニーズや考えを踏まえて企画を案出しし、議論しながら整えてきたわけですが、ダイバーシティの走りではないかという感じがします。そこがこれからも大事ですし、ハード、ソフトにとらわれず、



王尾英明 清水建設(株) 土木営業本部 副本部長(企画委員)

東京だけにこだわらず、色々なことを考えることではないかと思えます。今後も少しでもお役に立てれば良いかなと思っています。

王尾 私は企画委員としては見学会の企画が多かったのですが、参加される方々に満足していただけるように、計交研でしか見られない施設や聞けない話を中心に計画しました。様々な企業が会員になっているので、プロジェクトにしても施設にしても会員企業を通じてお願いすると、ありがたいことに非常にスムーズに話が進みました。見学会といながらも、観光的な要素も入れプログラムを組むのですが、私の企画はいつも詰め込み過ぎのところが、東北復興の見学では、仙台から入って福島に抜け、最後いわき駅で解散だったのですが、予定の電車で間に合わない事態となりました。結局、いわきの先の泉駅に先回りして電車で追いついたのですが、間に合った瞬間、わっと拍手が沸き起こったということもありました(笑)。盛りだくさんにするのはいいけれど、少しバッファーを持たなくてはいけない



柳沼秀樹 東京理科大学 准教授
(司会 当会幹事長)

と反省しました。福島のリモートスタディツアーは、新型コロナによる緊急事態宣言で二度延期となり、三度目の正直でようやく開催にこぎつけましたが、初めてのリモート型見学会でした。福島駅、福島第一原子力発電所、大熊町の間蔵施設を結んで3元中継で、本当にうまくできるのか心配でしたが、皆様のご協力で何とかうまくいきました。

金子 私が最近企画したのは、昨年5月の首都高のリニューアル工事の見学会です。過去にも羽田線の見学会があったようですね。

寺部 2013年の春の見学会で、首都高の中でも特に劣化の激しかった1号羽田線を、工事が行われる前に船から見学したこともあったようです。会員の皆さまが関心を持たれていて、普段行けないところを見学する企画は当時からありました。そのあとだいぶ時間経ってかなり工事が進んでいるということで、首都高さんもぜひその後も見ていただきたいということで、金子先生が企画されたんですね。

今後期待することについて

司会 最後に、今後に期待することを一言ずついただければと思います。

金子 今後取り組んでいくべきことは、羽藤会長や家田前会長もおっしゃっている若い世代の実務者と研究者により多く参加いただく機会をつくることだと思っています。1つは「小研究会」活動で、スマートシティ・カーボンニュートラル、次世代モビリティ、流域治水をテーマに、40歳前後の大学教員がリーダーになって、実務の方も入って議論しています。そこで若い人同士の繋がりができれば良いと考えています。もう1つは私が世話役を務めている「産学共働若手勉強会」で、当初は一つのテーマを決めて勉強会を開いていましたが、メンバーの組織や分野が異なるためなかなか難しく、最近ではミニ講演会やプロジェクトの現場見学会などを中心に行っています。例えばメンバーの関心が高いAIについて、先端的な研究をされている先生の講義を(コロナ禍でしたので)リモートで開催しましたが、活発な質疑が行われました。また、コロナ前は1泊2日の合宿も行っていて、2018年には金沢大学で自動運転を開発されている先生を訪問し、実際に実証実験用の車両に試乗させていただき、翌日には輪島を訪れ、電動カート型の自動運転車両に乗車しました。その輪島が今年1月の能登半島地震で大きな被害を受けてしまい、私自身非常に心を傷めています。このような合宿を過去3回実施しました。最近では、開業前の宇都宮のライトレールや茨城県境町の自動運転バスなどを見学し、次世代のモビリティについて見聞を広める機

会を設けています。毎回、行事の後には懇親会を開催して交流を深めていまして、そのような取り組みにより、若手の参加を増やしたいと思っています。

白木原 計交研が世に発信できるパワーは、一定の会員数と企業会員がいることです。加えて、若い方をいかに取り込む、かつ女性を取り込むことを考えなくてははいけません。それが根本にあって、また、いかに魅力ある計交研にするかということでは、他ではできない企画をすることだと思っています。計交研の強みは、大学などの研究機関に加えて、運輸事業者、建設会社、建設コンサルタント、シンクタンク、不動産など多様なメンバーがいることだと思っています。この強みを活かした、魅力的なセミナー、見学会を提供して、どんどん若い方や女性を迎え入れることが大事だと思っています。

司会 おっしゃっていただいたように、若い方が1つポイントとおっしゃいます。私が学生のときの計交研の印象は、ちょっと敷居が高いというか、おそれ多くもみたいな感じが

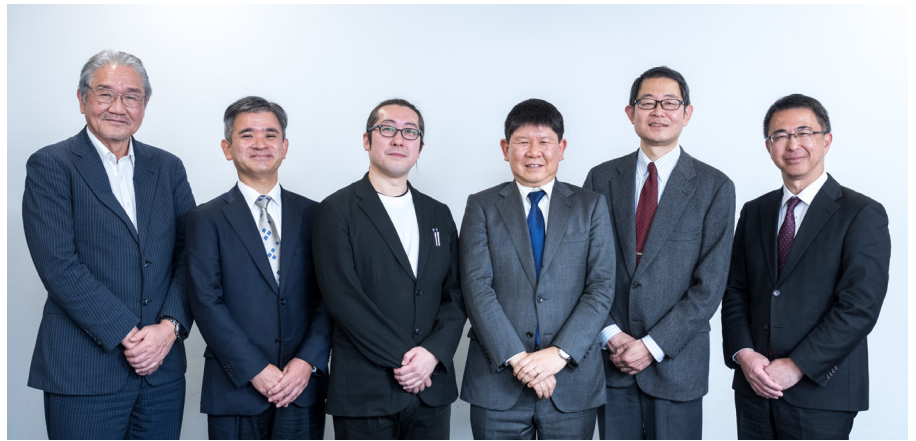


白木原隆雄 計画・交通研究会 事務局長

あったので、入りやすい雰囲気をつくっていくことが大事かと思います。小研究会は、比較的若手の先生方が多く入っています。私も以前やらせていただいて面白いと思ったのは、民間の方と協力して実務的な観点から自身の研究をブラッシュアップできるところです。理論的なこともやっていますが、「実務から見たら、ギャップあるよね」とか、忌憚のない突っ込みをいただけます。実務の方からするとうまく自分の業務に使える、もしくはそれを新しいビジネスのチャンスにつなげられる視点もあると聞いております。これを充実させることは大事だと思いますし、まだ試行的な部分もあるので、本格化させていく仕組み、例えば、資金的なバックアップや体制など。うまくコーディネートして、「あの企業とやってみたらどうですか」などとやっていき盛り上げることをしていきたいと思っています。

王尾 私はゼネコンに勤めているのですが、どうしても目線がプロジェクト単位になりがちです。一方で、計交研は、交通系の会社の方がいれば、デベロッパーの方もいらっしゃるし、先生方など外部の方々もたくさんいらっしゃるって、広い視点で俯瞰して色々なプロジェクト見学やイベントを計画いただいています。参加することによって、色々な気づきをいただける、本当に貴重な機会だと思っています。これから会員企業の幅広い視点を活かして、色々な気づきをいただける研究会であればいいなと思っています。

下大菌 皆さんおっしゃったように、視点の広さが大きいと思います。ここが維持されることと、新しいテーマ、新しいこと、新しい課題を、「ど



撮影 | 大村拓也

うやったらいいか分からないけど、とりあえず現場へ行ってみよう」とやってみることだと思っています。物事の課題は全部現場で起きるので、机の上だけではどうしようもないところが、特に土木の世界ではあります。私も鉄道会社にいて、ひしひしと感じるのは「社会の構造が変わりつつある」ことです。建設業も運輸業も人が足りない時代になっていますし、若い人はなかなかそこで働いてくれない時代になっています。AIやIoTを入れないと仕事が成り立たない、現場でやらなくてもできる仕事に変えていかないと成り立たない。一方で、能登地震を見て思うのですけど、現場で暮らしている方はいるし、そこに訪れる方もいるわけで、そのために交通は必要だし、そのためのインフラも必要で、どうやって維持しながら良くしていくのか考えないといけない。そうなるより現場の人の営みにフォーカスを当てる必要があるというのが個人的な感想です。いずれにせよ、計交研はこの10年ぐらいそういう方向に向かってきている感じがします。当然インフラをどうやって維持する、つくり変えるという技術はコアな部分として持ちつつも、人々の困っているところに光を当てるのが若い人

も含めてできる会になれば、サステナブルな会になるのではないかなという感じがしますね。

寺部 今後のキーワードは、「海外」「外国人」「留学生」と思っていて、海外プロジェクトは結構ゼネコンさんもやっているし、鉄道事業者も関わりますよね。計交研の活動でだいぶ勉強させてもらい、インドの高速鉄道も非常に勉強になったし、日本の会社が海外で意外に活躍していることを学生たちはあまり知らない部分もあるし、海外プロジェクトは今後も引き続きやっていってほしいと思います。外国人の労働者は絶対に必要だし、留学生はその先頭に立つ立場になるだろうし、土木を学んでいる人に限らない、ほかの分野でも日本で勉強している人が日本の建設技術を知ってすごいと思う、そういうのは広い意味で建設業界のPRになるので、今もサマースクールをやっていますが、外国人向けとか留学生向けのイベントを続けていくのは大事な気がします。

司会 若者、外国の方、留学生をうまく巻き込むこと、現場の人々にフォーカスしていくことは大事です。そこは常に意識してやっていくことが重要と感じた次第です。本日はどうもありがとうございました。

Contribution

法人正会員 | 寄稿

2024年7月末現在、計画・交通研究会には法人正会員15社、法人賛助会員50社が参画しています。
法人正会員15社の方々にも寄稿いただきました。

寄稿法人正会員 [五十音順]

株式会社大林組 / 小田急電鉄株式会社 / 鹿島建設株式会社 / 管清工業株式会社 / 京王電鉄株式会社
清水建設株式会社 / 大成建設株式会社 / 鉄建建設株式会社 / 東急電鉄株式会社 / 東京地下鉄株式会社 / 東武鉄道株式会社
東日本旅客鉄道株式会社 / みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社 / 三井不動産株式会社 / 三菱地所株式会社

※執筆者の肩書は執筆時のものです。

株式会社大林組 | インフラを支える業界の魅力向上と発信

計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。

さて、2024年度からは改正労働基準法が建設業にも適用され、弊社においても継続して働き方改革に全力で取り組んでいます。一方、建設業界の働き方改革においては業界全体の魅力向上という側面もあります。残念ながら建設業に魅力を感じる若者は多くはなく、業界外から「建設業で働きたい」と思われるような大きな改革を今やっていかなければ、若者はこの業界に入ってきません。現在若者の入職を促し担い手を確保することが喫緊の課題であり、そのためにも「新4Kの実現」に向けて業界を挙げて魅力向上とその発信に努めているところです。

貴研究会は設立以来、国土やインフラに関わる産官学の人のみならず、経済などを専門とする事務系の人、また学生などの若い人たちが幅広く集い、相互に啓発し合いながら活動し、その取組を社会へ発信されています。その活動はインフラの重要性やそれを整備する仕事のやりがい等、建設業も含めインフラを支える業界の魅力を社会に知らせることに大変寄与されており、その発信力に今後も大いに期待を寄せています。

また、貴研究会のセミナーや視察会などの活動を通して様々なメンバーとの交流を深め、日々の業務の範疇にとどまらない幅広い視野を持った技術者が、広く我が国のインフラ整備の場で生き生きと活躍する。それは、きっと業界全体の魅力向上にも大いに繋がるものと期待しています。

貴研究会のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。



野平明伸
株式会社大林組
代表取締役 副社長執行役員

小田急電鉄株式会社 | 国土と交通のより良い未来に向けて

計画・交通研究会の設立50周年、そして一般社団法人化15周年を迎えることに、心よりお慶び申し上げます。この節目に、計画や交通の将来について考える機会を得られることを大変ありがたく思います。

近年の社会環境は、世界情勢の予測不能さや、ダイバーシティやESG投資の増加、AIやデジタル通信の進歩により、働き方や価値観も急速に変化し、不確実性が高まっています。特に、テレワークの普及や外食機会の減少などの生活様式の変化は、鉄道事業に大きな影響を与えています。

このような変化の激しい社会の中で、鉄道事業は人口動態だけでなく価値観の変化にも適応する必要があります。解決策として、利用者や生活者の視点から都市インフラ全体を考慮した将来像を描き、レジリエンスを高めることが大切であると感じています。そのためには、道路と鉄道、まちと鉄道といった都市インフラを担う行政や企業を横串にした議論を計画段階から行い、共通のビジョンを描くことが重要であると考えます。

計画・交通研究会には、この重要な課題についての議論をリードし、国土と交通の未来を形成するための道筋を示していただくことを期待しています。それと共に、当社も社会インフラを担う事業者として、具体的な取り組みを通じて、お客さまの暮らしをより豊かなものにしてまいります。



立山昭憲
小田急電鉄株式会社
取締役 専務執行役員
交通サービス事業本部長

鹿島建設株式会社 | 国土強靱化に向けた国土計画

貴研究会におかれましては、設立から節目の50周年を迎えられること、誠におめでたく、改めてお祝い申し上げます。

さて、本年1月には、元日に震度7の能登半島地震が発生し、甚大な被害が発生したのは記憶に新しいところです。(一社)日本建設業連合会では、国土交通省北陸地方整備局より被災の大きかった能登半島先端の珠洲地区、輪島地区への道路啓開の依頼を受け出動し、斜面崩壊や倒木等で通行止めとなった道路の緊急復旧作業に対応しました。

倒壊した木造家屋や土砂崩れの下敷きになった方を救助・救命するためには、警察、消防、自衛隊、医療チーム等の救命に携わる方々が少しでも早く到着して活動を開始することが重要ですが、能登半島地震では生存率が大幅に下がるとされる発生72時間までに現地に到着できないケースが多発しました。

また、近年の災害においては、避難所生活環境が劣悪なことに起因する災害関連死が大きな課題とされていますが、能登半島地震においても食料・水・毛布・紙おむつ・簡易トイレ・燃料等の緊急物資が行き渡るようになったのは地震発生から1週間程度経過してからでした。

2011年に発生した東日本大震災でも被災した現地へのアクセスとして、初動は建設会社による道路啓開作業でした。「くしの歯作戦」と称し、内陸部を南北に貫く東北自動車道から、「くしの歯」のように沿岸部に伸びる何本もの国道を、救助・救命ルート確保に向けて切り開く作戦を展開し、5日間で15ルートを確認しました。

東日本大震災や今回の能登半島地震の教訓を踏まえて、リダンダンシー(冗長性)のある複数のアクセス確保等、更なる国土強靱化に向けた国土計画を進めていかれることを期待しております。



芦田徹也
鹿島建設株式会社
常務執行役員
土木管理本部副本部長

管清工業株式会社 | 下水道施設の健全な運用

計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

我が国の下水道は、明治中期より建設が始まり現在では管路延長約49万km、人口普及率81%（汚水処理普及率は93%）となり、日本国民のほとんどが下水道の恩恵を受けていると言っても過言ではありません。また、管路施設だけでも80兆円を超える貴重な国民資産となっています。

しかし、老朽化の進行は他のインフラと同様に標準耐用年数を経過した管路が3万kmを超え、老朽化対策は待ったなしの状況となっています。また近年頻発する自然災害により、下水道施設においても甚大な被害をもたらし、市民生活に大きな影響を及ぼしています。

特に小規模自治体においては、人口減少、水道使用料収入の減少、施設の老朽化、技術系職員の減少等、小規模ならではの課題は山積しています。

これらの課題に対しては、日頃からの計画的な維持管理と施設の耐震化、災害支援体制の早期立ち上げのための体制強化等が急務と言えます。しかしこれらの解決には、これまでの施策や考え方で解決は難しく、今後若い人材による新たな発想やマネジメント力が必要になってくるのは明らかであります。計画・交通研究会の様々な活動の中で、これらの分野の重要性についても情報の発信等によりご支援をいただき、貴重な資産である下水道施設の将来にわたる健全な運用を実現したいと考えております。合わせて今後の貴研究会の益々のご発展を祈念しております。



伊藤 岩雄
管清工業株式会社
専務取締役

京王電鉄株式会社 | 駅を基軸としたまちづくりのさらなる推進

計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

振り返れば、この数年は、新型コロナウイルスの拡大により、鉄道グループのビジネスモデルが根底から揺るがされる事態となりました。直接的な要因は、リモートワークの普及による通勤需要を中心とした人流の減少ですが、価値観の多様化・雇用と働き方の変化・社会全体のデジタル化・競争環境の変質という、時間をかけて将来到来したであろう事象が、急速に進展したとも言え、人々のライフスタイルが不可逆的に変化したことについても受け入れざるをえなくなりました。

しかしながら、鉄道が歴史的に担ってきた沿線で生活する方々の「幸せな暮らしの実現」を改めて実感する機会ともなり、現在、街の結節点である駅を基軸とした「まちづくり」により、移動促進と活気ある沿線作りを以前にも増して精力的に進めています。そして、新たな移動需要や生活サービスの創出にあたっては、共通の利害を持ちながらも異なる考えを持つ沿線内外のパートナーとのネットワークをより強固なものとし、議論を尽くしながら、今後の価値創造ストーリーを描いていきたいと考えています。

多くの業界から様々な専門分野を持つ方々が集う貴会の活動の中で、ともに地域社会を発展させるパートナーの皆様との出会いに大いに期待いたします。

末筆となりましたが、貴会の今後の一層の発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



井上 晋一
京王電鉄株式会社
取締役常務執行役員
鉄道事業本部長

清水建設株式会社 | グローバル人材育成の場として

計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。この半世紀を振り返ると、世界の情勢も大きく変化し、中国やインドなど目覚ましい発展を遂げた国も多くあります。日本国内に限らず、こうした都市の発展には常に交通インフラの整備がつきものでした。

世界第4位の人口と豊かな資源を有し、順調な経済発展から国際的存在感をますます高めつつあるインドネシアもその一つです。首都ジャカルタでは慢性的な交通渋滞緩和に向けて、ジャカルタ MRT (都市高速鉄道) が急ピッチで整備されており、2019年には南北線の一部が開通しました。弊社でも、104工区と105工区の地下2工区を担当し、地下駅4駅と地上工区と接続する開削トンネル460m及びシールドトンネル5.2kmを施工しました。特にシールドトンネル工事は同国で初めてのシールド工法でのトンネル掘削工事であり、シールド工事の経験が全くないインドネシア人をJVスタッフや掘進工として採用し、日本人職員が施工方法を24時間体制で教育指導しながら施工を進めました。当然苦難も多くありましたが、竣工までたどり着いたときには、モノづくりとヒトづくりを通して国際貢献ができる海外工事ならではの喜びを実感しました。

人工知能やロボットが台頭することによって、技術者個人に求められる能力やスキルも変化してきています。また、質の高いモノ作りを進めていくだけでなく、技術移転をさらに積極的に促進することにより、優れた海外技術者の育成も求められます。貴研究会においては、多様化する技術者像に柔軟に対応し、国内外で活躍できるグローバル人材育成の場となることを期待しております。



大迫 一也
清水建設株式会社
常務執行役員
グローバル事業本部土木国際支店長

大成建設株式会社 | 日本の建設業が国際社会で果たす役割について

計画・交通研究会が設立50周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

石川県能登地方を震源とする強い地震が新年早々に発生し、多くの人命や社会インフラへの被害が発生しました。当社は、震災直後から国交省からの要請等により、道路啓開など応急復旧作業に当たりました。2016年4月に発生した熊本地震が思い起こされます。当社は地震で落橋した熊本県の阿蘇大橋の架け替えの工事を行いました。熊本地震復興のシンボルとして、地震で分断された国道325号阿蘇大橋ルート of 早期復旧に寄与するべく、強い使命感を持って工事に取り組みました。そして、貴会会報(2021.7月号)においてご紹介をして頂きました。(寄稿「熊本復興のシンボル ―国道325号 新阿蘇大橋の開通―」)

日本の建設業の強みは、品質・コスト・工期・安全・環境配慮はもちろん、自然災害への強靱性をはじめ、インフラのライフサイクル全体の経済性および人材育成と多面的に能力を発揮できるところです。

私は2023年4月から経団連の開発協力推進委員会の政策部会長を拝命しておりますが、国際社会での開発協力に果たす我が国の役割は重要性を増していると感じています。日本の建設業が持つ総合的な技術力は、まさしく相手国の社会課題の解決に資する「質の高いインフラ」の展開を通じて貢献できる開発援助力であると思います。

貴会のさらなる幅広い活動および発展を心より祈念致します。



木村 普
大成建設株式会社
副社長執行役員 土木営業本部長

鉄建建設株式会社 | 「建設DX」将来に向けての対応

計画・交通研究会が設立50周年を迎えられましたことに、心よりお祝いを申し上げます。

2020年より猛威を振ってきた新型コロナウイルスが、昨年より感染症法上の5類に移行したことを受け、社会経済活動に明るい兆しが見えてまいりました。一方で、建設業においては「人手不足」「従事者の高齢化」が顕著となっており、将来に向けての生産性の向上、安全性の確保への対応が急務となっております。

当社では「建設DX」の取り組みの一環として、作業員の安全性向上や担い手不足解消を目指し、無人化施工の技術開発及びBIMや点群データ等ICT技術の活用による効率化、生産性及び安全性向上に向けた取り組みを積極的に進めています。今日、日本全体が少子高齢化社会に直面しており、高齢者・障害者等の移動制約者を含む全ての人が利用しやすい交通インフラや住み心地のよいまちづくりの実現においても、貴会の活動がますます重要となっております。

貴会には「イブニングセミナー・特別講演会」や「現地視察会」、「会報」の発行等を通して、わが国における計画および交通分野の発展に寄与する提言や様々な業界との連携強化についても期待をしております。

今後もより広い視野での活動をお願いするとともに、貴会のさらなる発展を祈念いたします。



伊藤 泰司
鉄建建設株式会社
代表取締役社長

東急電鉄株式会社 | 新しい取り組みへ果敢に挑戦

この度は計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。

この50年間、当社線における輸送人員は、ネットワークの拡大や沿線人口の増加を追い風として、一時的な停滞時期こそあれ、増加を続けてきました。しかしながら、新型コロナウイルスの流行により、お客さまの生活スタイルが大きく変わり、輸送人員も大きく減少しました。足もとでは輸送人員に回復の兆しも見られ始めているものの、未だ、コロナ前の水準には戻っていない状況です。

そのような状況ですが、直近では2023年3月18日に東急新横浜線が開業し、同時に相模鉄道への相互直通運転を開始しました。また、2023年8月からは「人」「まち」「交通」をデジタルでつなぐ乗車サービスの構築を目指し、クレジットカードのタッチ機能・QRコードを活用した乗車サービス(Q SKIP)の実証実験を始めるなど、新しい取り組みにも果敢に挑戦しております。

輸送人員の減少は、少子高齢化やテレワークの進歩を契機として、将来的にいつか起こり得るものとして予測していたこともまた事実です。このような逆境をチャンスに変え、今後もお客さまと目的とを繋ぎ合わせる自発的な移動の創出など様々な取り組みにチャレンジしていきたいと考えております。

計画・交通研究会は、産学民のトップランナーの皆さまから学び、交流させていただける他に代えがたい貴重な場であると考えております。今後も引き続き連携を図らせて頂くとともに、ますます計画・交通研究会が発展されますよう、心より祈念しております。



伊藤 篤志
東急電鉄株式会社
代表取締役 専務執行役員

東京地下鉄株式会社 | 東京の魅力・価値の向上に向けて

計画・交通研究会の設立50周年誠におめでとうございます。

貴会は、都市計画や交通の分野で幅広く貢献されてきましたが、都市鉄道の分野では、都市圏における高速鉄道網の基本計画、都市鉄道の整備促進やサービス向上を促す諸制度の策定等に歴代の先生方が深く関与され、東京メトロや前身の営団地下鉄は大変お世話になってきました。

貴会が発足した1974年の営団地下鉄の状況を振り返りますと、有楽町線の建設途上で、半蔵門線、南北線、副都心線は存在せず、営業キロ123.9キロ(現195.0キロ)、一日あたり輸送人員389万人(2023年度652万人)、単体純利益で49億円の赤字(2023年度458億円の黒字)という状況でした。第二次石油危機による著しい物価上昇があり、10月には初乗り運賃を40円から60円にするなどの大幅な値上げを行っています。

このような苦しい状況から、現在上場を目指せるまでの会社になれたのは、当社の事業基盤である東京という「まち」が発展し、それとともに弊社が成長できたからだと考えます。今後も多様なパートナーと連携し、駅・まち一体の空間整備や、交通ネットワークの磨き込み等により、東京の魅力と価値を高めていきたいと思ひますし、そのためにも貴会の先生方のご指導や、会員間の情報交換を今まで以上にお願いしたいと存じます。

最後になりますが、壮年真っ盛りを迎えられた貴会の益々の発展を祈念いたしまして、設立50周年の祝辞とさせていただきます。



小坂彰洋
東京地下鉄株式会社
代表取締役 専務執行役員

東武鉄道株式会社 | 皆さまとの交流を通じて

計画・交通研究会の設立50周年を心よりお慶び申し上げます。

私は2019年4月より評議員を務めておりますが、振り返りますと着任した年の秋の見学会では「栃木のインフラと観光！秋の県央・足尾エリアを巡る」というテーマで、当社が運行しているSLや地域との関わりを紹介させていただきました。私も説明者として参加いたしましたが、当社の取組みに対して国土やインフラに関わる企業等で活躍される皆さまと活発かつ有益な意見交換ができ貴研究会の価値を実感しました。SLをはじめ日光・鬼怒川エリアの更なる活性化ということでは様々な取組みを継続しており、特に昨年7月より新型フラッグシップ特急として「スペースX」の運行を開始し皆さまよりご好評をいただいております。

貴研究会においては他にはないセミナーや視察会を開催いただいております、それらを通じて大いに啓発され、多くの方々と交流しながら知見を深め、刺激をいただけてきました。これは私ども交通インフラやまちづくりに携わる者にとって大変貴重な機会であり財産となっております。あらためて感謝申し上げます。

末筆となりましたが、今後の貴研究会の更なるご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



志村 健
東武鉄道株式会社
執行役員 鉄道事業本部副部長
兼 事業戦略部長

東日本旅客鉄道株式会社 | 「ヒト」を起点に新しいサービスを提供

設立50周年、心よりお祝い申し上げます。半世紀もの長きにわたり、土木・インフラ整備やその計画に関する議論をけん引してこられた貴会のご尽力に敬意を表します。

この5年を振り返ってみても、新型コロナウイルスによる移動・交通行動の変容や生活スタイルの劇的な変化、そして地震・水害をはじめとした災害のさらなる激甚化など、我々の生活とそれを支えるインフラを取り巻く環境は目まぐるしく変化し続けています。

当社はグループ経営ビジョン「変革2027」において、都市を快適に、地方を豊かにという目標を掲げ、鉄道を起点としたサービスを変革し、「ヒト」を起点とした価値・サービスの創造と提供に取り組んでいます。具体的には、首都圏多方面からの直行を可能とし東京の国際競争力強化に資する羽田空港アクセス線整備、中央線へのグリーン車導入など、付加価値の高い輸送ネットワークや移動空間の構築を進めています。また、朝の混雑緩和や働き方改革を促進する「オフピーク定期券」の導入、MaaSプラットフォームによるシームレスな移動の実現など、社会や技術の変化に対応した新しいサービスを創造し提供しています。

引き続き、貴会の皆様からさまざまな知見をいただきながら、「ヒト」とリアルなアセットを重層的かつ有機的につなぐネットワーク、技術と情報を中心にあらゆるものをボーダーレスにつなげ広げていくネットワークの力をさらに高め、お客さまや地域の皆さまの「心豊かな生活」を実現していきます。

今後も貴会が会員のネットワークを活かし、多様かつ先進的な視点から交通と都市・地域のあり方をリードしていただくとともに、貴会のますますの発展を祈念いたします。



小山 宏
東日本旅客鉄道株式会社
常務執行役員

みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社

多様な人が交流するプラットフォームとして

この度は計画・交通研究会の設立50周年、誠にありがとうございます。心よりお慶び申し上げます。

弊社はくみずほグループの中核会社として、経済・社会を読み解くリサーチ機能、経営戦略、官民連携、サステナビリティ、デジタル等の領域におけるコンサルティング機能、先端技術知見とIT実装の機能を有し、くみずほの金融機能も掛けあわせることにより、「金融を越える新たな価値」をお客さまに提供しております。

インフラ・まちづくり分野においては、新たな整備・拡充が重要視される時代から既存ストックの維持管理が課題視される時代へと移行する一方、人口減少・高齢化や地方部の過疎化により深刻な人手・財源不足にも直面し、従来の手法に囚われない発想や技術革新が求められています。また、気候変動を始めとする地球規模課題への対応も急務となる中で、持続可能な社会づくりに向けた取り組みも欠かすことはできません。こうした情勢下、社会課題に向き合う公共・民間セクターが、これまで以上に地域や分野の垣根を越えて連携を強化し、新たな価値創造に挑戦していくことが求められていると感じております。

当会は、セミナー・会報・見学会などを通して、広くインフラ・まちづくりに携わる産官学の組織を巻き込み、学生や若手・中堅社会人から経営陣、業界を牽引する有識者の方々まで、多様な立場の会員が闊達に意見を発信・交換することができる貴重な機会を提供いただいております。今後も、日本の国土づくりを担う方々がより広く・深く繋がり交流するプラットフォームとして、益々繁栄することを祈念しております。



豊沢 泰寿
みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社
執行役員 コンサルティング本部長

三井不動産株式会社 | 私と計画・交通研究会、「一人十色のまちづくり」

計画・交通研究会の設立50周年、誠におめでとうございます。

貴会は、初代会長の八十島義之助先生により、国土やインフラに関わるアカデミアと個人・企業・団体等により構成されるサロンとして設立されたと聞きました。土木分野の体制と人材が不十分な弊社にとり、貴会の幅広い活動と豊かな交流の場への参加は大変貴重な機会です。歴代会長の中村英夫先生、黒川洸先生、森地茂先生をはじめ、会員の多くの方々に多大なお力添えをいただいて参りました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

私は、都市計画変更などを伴う大規模開発の企画・推進を長く担当してきました。土木工学、交通工学の知見はとても重要ですが、それに乏しいことに劣等感を抱いてきました。社会人大学院で都市計画を学び直していたとき、家田仁先生、羽藤英二先生に教壇からご教示いただきながら、貴会では当時の家田仁会長の下で企画委員をさせていただきました。この経験は私の人生の大切な財産です。

羽藤英二会長のお言葉に、「一人十色のまちづくり」があります。私はこれが大好きで、度々引用させていただいています。

欲張りで素敵な個々人の様々なライフスタイルを支えるまちづくり…。それを実現に導く貴会の活動はまさに一人十色のタレント達が集まるサロンですね。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。



雨宮克也
三井不動産株式会社 建設企画部長
三井不動産エンジニアリング株式会社
代表取締役社長

三菱地所株式会社 | 学びと刺激に溢れた交流の場

計画・交通研究会設立50周年、誠におめでとうございます。

弊社は、東京駅周辺に位置する大手町・丸の内・有楽町地区(略して大丸有(だいまるゆう)地区)を中心に、まちづくりを進めています。弊社が貴研究会に入会したのは1998年ですが、当時の丸の内では、「世界で最もインタラクティブな街」をコンセプトとした新しい都市機能の創造に着手し、その活気と賑わいを、大手町・有楽町へと拡大し、ビジネス機能の深化と街の機能の多様化に取り組んでいました。こうしたエリアとしてのまちづくりによって、大丸有地区は、多くの就業者・来訪者が訪れる地区として成長し、近年でも、公共空間活用やウォークアブルなまちづくり、「駅まち」が一体となった空間づくり、スマートシティへの取り組みなど、時世に応じた進化に取り組んでいます。

計画・交通研究会では、初代の八十島義之助先生から、中村英夫先生、黒川洸先生、森地茂先生、家田仁先生、羽藤英二先生と、代々広い視座に立って、国土の開発・保全や交通インフラ、環境、その他ユニークかつ広範なテーマで「イブニングセミナー」や「視察会」「勉強会」などの各種活動に取り組まれており、私たちまちづくりに取り組む企業にとって、学びと刺激に溢れています。

多様化、複雑化するこれからの時代において、本研究会での学びや刺激、そこに広がる交流は、益々重要性を増す貴重なものと考えており、貴研究会の益々の繁栄を祈念しております。



井上俊幸
三菱地所株式会社
執行役員

Documentation [資料編] 社団法人化以降の歩み

Activities | 現在の活動状況

1. イブニングセミナー

広いテーマをとりあげたセミナーを年に5回程度、開催しています。現地視察会と連動したセミナーもあり、多角的な理解に努めています。参加型とオンライン型を組み合わせで開催し、開催後は一定期間、会員向けにYouTube配信をしています。



日本大学駿河台キャンパスにて



東京大学本郷キャンパスにて

2. 見学会

会員を対象とした社会基盤整備や都市開発に関する現場見学会を、春と秋に開催しています。その他にも適宜実施しています。



成瀬ダム施工現場



能代港沖の洋上風力発電



北海道見学会

3. 広報委員会活動

当会の内外に向けた情報提供やより深い関係性づくりを目指して、会報・HP など媒体制作を通じて情報発信を行っています。会報は隔月で発行し、国土やインフラを中心により広い視点でテーマをとりあげています。また、HPでは独自に特別記事や動画を作成して掲載しています。



特別記事 (HP)



インタビュー動画 (HP)



会報誌

4. 小研究会

特定のテーマを設け、知識や情報の交換、検討・議論しています。2023年度は次の4テーマで研究会を開催しました。

1. スマートシティ・カーボンニュートラル小研究会
2. 流域治水小研究会
3. 次世代モビリティ小研究会
4. 地域問題小研究会

地域問題小研究会では、沖縄および北海道で開催し、施設見学と共に現地でミニ講演会を行いました。



地域問題小研究会 ミニ講演会 (北海道)

5. 産学共働若手勉強会

次世代を担う土木・交通分野における若手の研究者と実務者の交流促進を目的に、自主勉強会や合宿などの活動を行っています。また、インフラ施設や都市開発プロジェクトの現場を見学する機会も随時設けています。



自動運転バス見学会 (茨城県境町)



東京電力PG千葉印西エリア洞道新設

6. 留学生のための日本インフラセミナー (留学生インフラセミナー)

我が国が世界に誇りうる、新幹線、高速道路、都市鉄道、都市開発等のインフラ分野について、座学と現場見学を通じて、日本で学ぶ留学生に知ってもらふセミナーを実施しています。



JR 東海施設



管清工業厚木の杜環境リサーチセンター

7. 海外インフラ展開人材養成プログラム

インフラの海外展開における国際契約やマネジメントなどについて学び、また、様々な分野にスコープを拡張して世界と日本をとらえる講義などを通して、国際的なプログラムで活躍できる人材を養成します。

[開催主体：政策研究大学院大学]



家田仁 GRIPS 特別教授による講演



グループワークの活発な討議

Map [資料編] 社団法人化以降15年間の見学会

全国編
15 Locations



15 2023年10月「成瀬ダム&秋田駅&秋田・能代洋上風力」秋田県東成瀬村、秋田市、能代市



1 2009年10月「立山カルデラ・常願寺川の砂防・治水事業と地域づくり」富山県立山町



5 2012年11月「熊野地方における災害と歴史から学ぶ～豪雨地域十津川街道と世界遺産の熊野古道を辿る～」奈良県五條市、十津川村、和歌山県新宮市、田辺市



14 2023年6月「北海道新幹線の札幌延伸と変わる道都、全道地方都市の展望」北海道札幌市、北広島市



12 2022年5月「復興道路で辿る東北震災復興とまちづくり」宮城県仙台市～青森県八戸市、宮城県名取市、南三陸町、気仙沼市、岩手県陸前高田市、大槌町、宮古市、普代村



3 2011年11月「静岡県域のインフラ事業（伊豆縦貫、浜岡原発、新東名等）」静岡県静岡市、御前崎市、三島市、清水市



13 2022年11月「復帰50周年を踏まえて、沖縄の将来を考える」沖縄県那覇市、名護市、伊江島

No.	年	月	テーマ	場所
2	2010	10月	下北半島の原子力関連施設と国土的位置づけ	青森県六ヶ所村、東通村、十和田市、三沢市、八戸市
4	2011	11月	被災地の状況と復興計画	宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市
6	2013	10月	産業・市民生活を支えるエネルギーの現在・過去・未来をみる（福岡空港拡張、大牟田エコタウン、日田市バイオマス資源センター等）	福岡県福岡市、大牟田市、大分県日田市、九重町、由布市、大分市
7	2015	10月	3.11から5年、復興の今 ～宮城・福島を中心に～	宮城県東松島市、利府町、仙台市、名取市、岩沼市、福島県相馬市、南相馬市、富岡町、楡葉町
8	2016	10月	Fast & Slow 名古屋から未来の交通を考える（名古屋駅、都市センター、ニューブリッジ、トヨタ自動車、シンシアの丘等）	愛知県名古屋市中区、豊田市、長久手市、岐阜県各務原市、土岐市
10	2018	10月	富山を彫り込む！	富山県富山市、立山町、黒部市（黒部峡谷）
11	2021	6月	福島リモートスタディツアー	福島県

※全国編 9 は旅程の一部に関東を含む

関東編
16 Locations

9 2017年10月「ハッ場ダムと小布施の町並み修景・善光寺口再整備ほかを巡る」群馬県長野原町、長野県小布施町、長野市

11 2018年6月「東京外環（東名JCT・中央JCT・大泉JCT）巨大地下空間を体験する」東京都世田谷区、三鷹市、練馬区

13 2019年10月「インフラと観光—栃木を題材に」栃木県宇都宮市、日光市

10 2017年6月「銀座線メタモルフォーゼ～進化の90年～」東京都港区、渋谷区、台東区

16 2023年5月「暮らしと経済を支える大都市の高速道路リニューアル工事現場見学」東京都品川区、江東区

4 2012年5月「東京駅再開発と東北縦貫線事業」東京都千代田区

No.	年	月	テーマ	場所
①	2009	4月	新宿・渋谷一大規模ターミナル改造と都市再生	東京都新宿区、渋谷区
②	2010	3月	海から眺める東京湾岸の都市開発と交通施設	東京都港区
③	2011	5月	東京スカイツリーを核とした地域開発事業	東京都墨田区
⑤	2013	6月	高齢化する道路構造物のメンテナンスについて考える	東京都品川区
⑥	2014	4月	東京オリンピック会場予定地の確認とインフラ対比（1964→2020）による知見の発掘	東京都新宿区、中央区、港区、江東区
⑦	2014	10月	東京田園都市線の栄光と未来—TOD先端事例から未来戦略を学ぶ—	神奈川県横浜市、東京都世田谷区
⑧	2015	5月	日本橋発着、東京ウォーターフロントの可能性を探る船の旅	東京都中央区
⑨	2016	5月	羽田アクセスはどう変貌するのか？～新ルートを歩く～ JR東日本による品川開発プロジェクトおよび羽田空港アクセス線ルート	東京都大田区、港区
⑫	2019	5月	高輪ゲートウェイ駅と虎ノ門エリア	東京都港区
⑭	2022	6月	新東名高速道路見学会	神奈川県松田町
⑮	2022	7月	首都圏のリニア中央新幹線ルートを辿る	東京都品川区、神奈川県相模原市

Seminar 資料編 社団法人化以降15年間のセミナー一覧

2009 | 平成21年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1月	共催 セミナー (当て塾Ⅷ)	観光原論研究(10) 観光の意味論 「ピカソを超える者は／評伝 鈴木忠義と景観工学の誕生」を書き終えて	鈴木忠義(当て塾) 篠原修(政策研究大学院大)
2月	共催 セミナー (当て塾Ⅷ)	観光原論研究(11) 観光の意味論(つづき)	鈴木忠義(当て塾)
3月	講演	Spaital Modelling and Commuting: A Summary over 40 Years	John Andrew Black(東北大)
4月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(12) 観光の意味論(つづき)	鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(13) 観光の意味論(つづき) 足利市観光まちづくりシンポジウムの報告	鈴木忠義(当て塾) 野倉 淳(当て塾事務局)
5月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(14) 観光の意味論(つづき) 交通の発達と近代ツーリズムの黎明	鈴木忠義(当て塾) 溝口周道(旅と観光研究室)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(15) 観光の基礎論(1) 足利市観光まちづくりシンポジウムの報告	鈴木忠義(当て塾) 小池利佳(日本交通公社)
6月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(16) 観光の基礎論(2)	鈴木忠義(当て塾)
7月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(17) 観光の基礎論(3, 4) オーストラリアにおける観光人材育成の事例	鈴木忠義(当て塾) 渡邊智彦(日本交通公社)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究(17) 観光の基礎論(訂正と追加)、観光の学と術の体系	鈴木忠義(当て塾)
8月	趣町塾	地図で見る	野々村邦夫(日本地図センター)
9月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	今後の共催セミナーの進め方 都庁展望室の再整備について	鈴木忠義(当て塾) 高橋 章(オフィス・ネオ)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の進化 その2 庭園は文化の表看板になれるか？	鈴木忠義(当て塾) 土沼隆雄(要松園コーポレーション)
	趣町塾	FDRとシーニックビュー	石田東生(筑波大)
10月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の進化 その3 都市における(観光)まちづくりとインフラ	鈴木忠義(当て塾) 永井 護(宇都宮大)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の進化 その4 「観光」の語源について	鈴木忠義(当て塾) 溝口周道(旅と観光研究室)
11月	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の深化 その5 東京湾諸港の再開発	鈴木忠義(当て塾) 金子 彰(東洋大)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の深化 その6 地域の文化資源	鈴木忠義(当て塾) 矢野和之(文化財保存計画協会)
12月	趣町塾	零落した山水都市の行くへ	中村良夫(東京工業大)
	共催 セミナー (当て塾Ⅸ)	観光原論研究の深化 その7	鈴木忠義(当て塾)
	特別 講演	超電導リニアと東海道新幹線バイパス	白國紀行(JR東海)

2010 | 平成22年

※所属と役職は当時のもの、敬称略

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1月	趣町塾	「事例：中東ドバイの国土づくり」	池上盛容 (JAPIC)
	共催 セミナー (当て塾IX)	観光原論研究の深化 その8	鈴木忠義 (当て塾)
2月	共催 セミナー (当て塾IX)	観光原論研究の深化 その9	鈴木忠義 (当て塾)
3月	趣町塾	中国の国土と交通	家田 仁 (東京大)
4月	共催 セミナー (当て塾X)	2010年度の共催セミナーの進め方	鈴木忠義 (当て塾)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光開発 その企画から計画まで (1) 調査・企画・計画の業務と技術の整理	鈴木忠義 (当て塾) 野倉 淳 (野倉計画事務所)
5月	趣町 サロン	建設コンサルタントの課題と展望	藤本貴也 (建設コンサルタンツ協会)
	共催 セミナー (当て塾X)	草津町の観光開発計画について	鈴木忠義 (当て塾)
6月	共催 セミナー (当て塾X)	観光開発 その企画から計画まで (3)	鈴木忠義 (当て塾)
	共催 セミナー (当て塾X)	都市をつくる風景	中村良夫 (東京工業大)
7月	趣町 サロン	平成の大合併に際しての新都市名の評価	中村英夫 (東京都市大)
	趣町 サロン	東京のインフラストラクチャー ―その発展と今後―	中村英夫 (東京都市大)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光開発 その企画から計画まで (4) 言葉磨きによる観光の魅力づくりへのアプローチ	鈴木忠義 (当て塾) 溝口周道 (旅と観光研究室)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の概説と修正 (1) 鳥取県国際観光振興アクションプログラム策定アドバイザー報告	鈴木忠義 (当て塾) 岩佐吉郎 (日本交通公社)
9月	趣町 サロン	すべての海路もローマに通ず	栢原英郎 (日本港湾協会)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の修正 (その2)	鈴木忠義 (当て塾)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の概説と修正 (3) 現代社会における公開型庭園のあり方	鈴木忠義 (当て塾) 土沼隆雄 (要松園コーポレーション)
10月	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の概説と修正 (4)	鈴木忠義 (当て塾)
11月	趣町 サロン	ゼネコンの現状とこれから	中山 等 (鹿島建設)
	共催 セミナー (当て塾X)	隅田川の魅力を探る (2) 絵日記から活用ドラマを拾い出す	鈴木忠義 (当て塾) 菅 博嗣 (あいランドスケープ研究所)
	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の概説と修正 (5) 「もてなし」の視点を広げて	鈴木忠義 (当て塾) 権代美重子 (ヒューマン・エデュケーション・サービス)
12月	共催 セミナー (当て塾X)	「都市づくり・まちづくりと観光」の討論	鈴木忠義 (当て塾) 中村良夫 (東京工業大) 永井 護 (宇都宮大)
	特別 講演	我が国鉄道の海外展開の近況	江口秀二 (国土交通省)

2011 | 平成23年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1 月	共催 セミナー (当て塾X)	観光原論研究・第2版の概説と修正(6)	鈴木忠義(当て塾)
2 月	共催 セミナー (当て塾X)	ベトナムの都市開発の現状と課題	永井 護(宇都宮大) 佐藤源治(日建設計シビル・ベトナム)
4 月	共催 セミナー (当て塾XI)	川場健康村・縁組協定30周年記念誌(仮)(1)	鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾XI)	川場健康村・縁組協定30周年記念誌(仮)(2) エッフェル塔、東京タワーからスカイツリーを考える	鈴木忠義(当て塾) 安島博幸(立教大)
	特別 講演	東日本大震災の被災状況と復興政策	森地 茂(計交研会長) 家田 仁(計交研副会長)
5 月	共催 セミナー (当て塾XI)	川場健康村・縁組協定30周年記念誌(仮)(3) 東日本大震災被災地視察・支援報告	鈴木忠義(当て塾) 菅 博嗣(あいランドスケープ研究所)
	共催 セミナー (当て塾XI)	東日本大震災に思う	鈴木忠義(当て塾)
6 月	共催 セミナー (当て塾XI)	災害列島日本におけるオートキャンプ場について	鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾XI)	ドラッカー『マネジメント』と観光原論(1)	鈴木忠義(当て塾)
7 月	共催 セミナー (当て塾XI)	ドラッカー『マネジメント』と観光原論(2)	鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾XI)	ドラッカー『マネジメント』と観光原論(3) 日本の食文化ー世界無形文化遺産登録に向けて	鈴木忠義(当て塾) 権代美重子(ヒューマン・エデュケーション・サービス)
9 月	共催 セミナー (当て塾XI)	復習を兼ねて カンボジア観光視察報告	鈴木忠義(当て塾) 金子彰(東洋大)
	共催 セミナー (当て塾XI)	観光原論補講：観光の進化を考える ポートランド日本庭園のディレクターシステムが果たした役割・意義と 国際交流の多面的効果	鈴木忠義(当て塾) 土沼隆雄(要松園コーポレーション)
10 月	共催 セミナー (当て塾XI)	観光原論補講：観光の基本式の深化 都道府県の観光振興政策に関する研究	鈴木忠義(当て塾) 岩佐吉郎(日本交通公社)
	共催 セミナー (当て塾XI)	世田谷川場縁組協定30周年記念誌	鈴木忠義(当て塾)
11 月	共催 セミナー (当て塾XI)	田園理想郷づくりー川場村への適用 観光地の歴史：モントレー	鈴木忠義(当て塾) 溝口周道(旅と観光研究室)
	共催 セミナー (当て塾XI)	人間に学ぶ地域づくり、国づくり 桂林国際観光フォーラム参加報告	鈴木忠義(当て塾) 渡邊智彦(日本交通公社)
12 月	共催 セミナー (当て塾XI)	東北の復興に向けて 東北視察報告(現状と復興計画)	鈴木忠義(当て塾) 当て塾事務局

2012 | 平成24年

※所属と役職は当時のもの、敬称略

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1月	共催 セミナー (当て塾XI)	日本の将来から川場の将来を考える	鈴木忠義(当て塾)
2月	共催 セミナー (当て塾XI)	日本の将来から川場の将来を考える(2) 姉妹庭園締結と庭園を核とした交流	鈴木忠義(当て塾) 土沼隆雄(要松園コーポレーション)
	特別 講演	国産旅客機MRJの開発状況	ニッ寺直樹(三菱航空機)
4月	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の将来から川場の将来を考える(3)	鈴木忠義(当て塾)
5月	共催 セミナー (当て塾XII)	川場健康村の同時代史的意義 日本の中山間地域利用を考える(4)	中村良夫(東京工業大) 鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(5) カブール首都圏開発計画推進プロジェクト	鈴木忠義(当て塾) 菅 博嗣(あいランドスケープ研究所)
6月	共催 セミナー (当て塾XII)	私の景色研究—広島および中国地方での試み	樋口忠彦(新潟大)
	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(6)	鈴木忠義(当て塾)
7月	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(7) —「新・日本の自殺」(文藝春秋)の解題	鈴木忠義(当て塾)
	共催 セミナー (当て塾XII)	旦那と番頭(政治家と官僚)	鈴木忠義(当て塾)
9月	共催 セミナー (当て塾XII)	一国の生命線 砂漠化防止活動の25年	鈴木忠義(当て塾) 小島通雅(サヘルの森)
	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(8) 交通発達の地域に及ぼす影響—山梨の事例	鈴木忠義(当て塾) 花岡利幸(山梨大)
10月	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(9) 「観光」の語の語源について	鈴木忠義(当て塾) 溝口周道(旅と観光研究室)
	共催 セミナー (当て塾XII)	観光開発の実践記録 近代化と観光	鈴木忠義(当て塾) 永井 護(宇都宮大)
11月	共催 セミナー (当て塾XII)	日本の中山間地利用を考える(10) 川場視察会報告	鈴木忠義(当て塾) 視察会参加者
12月	共催 セミナー (当て塾XII)	国立公園制度と日光	柴田宜久(栃木県歴史文化研究会)

2013 | 平成25年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1月	共催 セミナー (当て塾XII)	新たな「観光学体系」を求めて—問題提起	鈴木忠義(当て塾)
2月	共催 セミナー (当て塾XII)	アフガニスタン—水とみどりと子どもたち アジア太平洋地域の国際観光と国内観光 ベトナム北部 BaBe 湖周辺地区観光振興計画	菅博嗣(あいランドスケープ研究所) 渡邊智彦(日本交通公社) 野倉淳(野倉計画事務所)
	特別 講演	国土交通行政をめぐる最近の情勢	佐藤直良(国土交通事務次官)
5月	講演	インフラメンテナンス政策のこれから	家田仁(計交研会長)
10月	イブニング セミナー	電気事業の課題と中部電力の取り組み	水野明久(中部電力)
12月	イブニング セミナー	今、富士山の時代	小山真人(静岡大) 楓 千里(JTB パブリッシング) 守屋邦彦(JTB 総合研究所)

2014 | 平成26年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	東京オリンピック開催(2020年)に向けたインフラ整備の考え方と見通し	岸井隆幸(日本大) 佐野克彦(東京都)
4月	イブニング セミナー	パッケージ型海外インフラ事業の今後の在り方を問う	南部泰治(千代田化工建設) 森脇祥一郎(三菱商事)
7月	イブニング セミナー	気候変動交渉の現状とそのインパクト —原子力利用が見通せない中での削減目標設定—	本部和彦(東京大) 上野貴弘(東京大)
9月	講演	トランジット・メトロポリス東京の再構築	矢島隆(計量計画研究所) 渡邊功(東急電鉄)
12月	イブニング セミナー	国際交通基盤としての空港経営・港湾経営の新たな展開 ～その現在と未来～	安藤 圭一(新関西国際空港) 井上聰史(政策研究大学院大)
	技術 セミナー	インフラ産業の未来を創る —魅力の発見・創造・発信—	奥村組と共催

2015 | 平成27年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	鉄道事業の国際展開 ～鉄道発祥の地(英国)における挑戦	鈴木學(日立製作所) 西山隆雄(JR東日本)
4月	イブニング セミナー	元祖交通結節、日本橋のまちづくりと舟運	新原昇平(三井不動産) 守谷慎一郎(東京都観光汽船)
6月	特別 シンポジウ ム	中国の交通政策と国土政策の今を語る ～都市交通整備から国際港湾政策まで～	林家彬(国务院) 陸化普(清華大) 邵春福(北京交通大) 郭子堅(大連理工大)
9月	イブニング セミナー	3.11 から5年：復興の今 ～宮城・福島を中心に～	大口豊(JR東日本) 小森明生(東京電力)
12月	イブニング セミナー	モビリティが支えるウェルネスのまちづくり	大和裕幸(東京大) 原加代子(日産自動車) 清水喜代志(国土交通省)

2016 | 平成28年

※所属と役職は当時のもの、敬称略

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニングセミナー	インフラ維持管理におけるアセットマネジメントとPPP事業における維持管理～維持管理市場の創造に向けて～	藤野陽三(横浜国立大) 野田由美子(ブライズウォーターハウスコーパース)
4月	イブニングセミナー	日本企業の海外展開と求められる「内なる開国」～シンガポールでのITS事業を題材に～	伊東秀幸(三菱重工) 小西雅義(三菱重工)
6月	イブニングセミナー	石井国土交通大臣に聞く	石井啓一(国土交通大臣) 森地 茂(政策研究大学院大) 中山かおり(清水建設)
9月	イブニングセミナー	人にも動物にも優しく楽しい社会を目指して	高柳友子(日本介助犬協会)
12月	イブニングセミナー	次世代商業都市開発の方向性	佐々木誠(三井不動産) 木田隆子(ハースト婦人画報社)

2017 | 平成29年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニングセミナー	次世代につなぐ匠の技 ～国宝・姫路城の平成の保存修理工事～	河原茂生(鹿島建設) 中田正起(イスルギ) 永井貴晃(イスルギ)
4月	イブニングセミナー	公共交通のコンセッションと空港経営～関西エアポートの挑戦	三浦 覚(関西エアポート)
6月	イブニングセミナー	銀座線メタモルフォーゼ —進化の90年—	山村明義(東京地下鉄) 吉岡あずさ(アトリエ・ジーアンドビー)
9月	イブニングセミナー	ハッ場ダムの歴史	大西 亘(前国土交通省) 虫明功臣(東京大)
12月	イブニングセミナー	地域交通とライドシェア：地域社会とウーバー社による取り組み	岡村敏之(東洋大) 安永修章(Uber Japan)

2018 | 平成30年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
1月	特別講演	橋の臨床成人病学入門	三木千壽(東京都市大)
2月	イブニングセミナー	ここまで進化した天気予報の技術！ ～社会はこの進化をどう活かすか？～	高数 出(気象庁) 知花武佳(東京大)
4月	イブニングセミナー	電力設備の南海トラフ地震への備え	服部邦男(中部電力)
6月	イブニングセミナー	『地震予知』から地震発生予測への転換 ～インフラ実務へのインプリケーション～	平田 直(東京大学地震研究所) 島村 誠(防災科学技術研究所)
8月	イブニングセミナー	新幹線と富山のまちづくり・地域づくり	中川 大(富山大) 金山洋一(富山大)
12月	イブニングセミナー	1968年・霞が関ビルで日本の建築界が突破したもの 経年優化的街づくり 実践としての「霞が関ビル」リニューアル	松村秀一(東京大) 原田英利(三井不動産)

2019 | 令和元年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	イノベーションの本質：全固体型セラミックス電池はいかにして生まれたか	菅野了次（東京工業大）
4月	イブニング セミナー	“AI時代”のエンジニア・研究者の役割とは？ ～産学の若手によるディスカッション～	青山恵里（日本大） 梅村恭平（みずほ総研） 北野喜正（東急電鉄） 田中皓介（東京理科大） 金子雄一郎（日本大）
6月	イブニング セミナー	ウォークスケープ：景観法15年 ―生活景を掘り下げる―	石川 初（慶応義塾大） 中村良夫（東京工業大）
	イブニング セミナー	インドで鉄道をつくる	熊本義寛（JR東日本） 西野 謙（日本工営） 胡井則章（パデコ） 辻村 功（パデコ） 家田 仁（計交研会長） 茶木 環（計交研広報部会長）
12月	イブニング セミナー	「交通インフラを長く健全に保つために」 ～首都高速道路の大規模更新プロジェクト～	大島健志（首都高速道路）

2020 | 令和2年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
6月	イブニング セミナー	海ブラの海に浮かぶ日本の現実	岡かおる（エックス都市研究所） 二瓶泰雄（東京理科大）
10月	イブニング セミナー	インフラメンテナンスの新潮流 ―測量の最新技術はここまできた―	中庭和秀（クモノスコポーレーション） 布施孝志（東京大）
12月	イブニング セミナー	国土と交通の未来像を考える ～リモート・ディスタンシング・レジリエンス社会の新たな潮流～	小澤一雅（東京大） 加藤博和（名古屋大） 羽藤英二（東京大） 伊藤香織（東京理科大）

2021 | 令和3年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	江戸の土木 ―浮世絵から読み解く、100万都市・江戸の成り立ち―	渡邊 晃（太田記念美術館） 布施孝志（東京大）
6月	イブニング セミナー	小研究会の活動報告	真田純子（東京工業大） 知花武佳（東京大） 寺村隆男（清水建設） 大串葉子（椋山女学園大） 福田 敦（日本大） 柳沼秀樹（東京理科大） 手塚寛之（国土交通省）
7月	イブニング セミナー	宇宙はいったい誰のもの？―宇宙時代に向けた新たな社会システム	中須賀真一（東京大）
9月	イブニング セミナー	自転車は都市を救うか？～まちの厄介者からスマートな通勤手段へ～	疋田 智（自転車ツーキニスト） ヴァンソン藤井由実 山中英生（徳島大）
12月	イブニング セミナー	データ整備と防災の観点からみた熱海土石流災害	杉本直也（静岡県） 清田隆准（東京大） 布施孝志（東京大）

2022 | 令和4年

※所属と役職は当時のもの、敬称略

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	グリーンイノベーションのファイナンスデザイン	原田文代（日本政策投資銀行） 寺村隆男（清水建設）
6月	イブニング セミナー	中央リニア新幹線 ～新たな国土軸の形成が沿線にもたらすインパクト～	澤田尚夫（東海旅客鉄道） 毛利雄一（計量計画研究所） 有川貞久（東日本旅客鉄道） 谷井 健（京浜急行電鉄）
7月	イブニング セミナー	モビリティ新時代 空飛ぶクルマが未来を拓く ～空飛ぶクルマの現在地と将来構想～	鈴木真二（東京大） 中井 佑（テトラ・アビエーション） 佐々木康人（日本航空）
9月	イブニング セミナー	都市を木質化する	辻 靖彦（大林組） 服部順昭（東京農工大）
12月	イブニング セミナー	次世代への国土造りプロジェクト構想を議論する	中村英夫（日本プロジェクト産業協議会（JAPIC）） 丸川裕之（JAPIC） 藤本貴也（JAPIC） 池田周平（みずほ銀行） 栗田 悟（北海道建設業協会）

2023 | 令和5年

月	行 事		
	形式	テーマ	講演者
2月	イブニング セミナー	ジェネレーションZからαへ：これからの世代は交通をどう変えるのか？	岡井大輝（Luup） 加藤浩徳（東京大） 柳沼秀樹（東京理科大）
6月	イブニング セミナー	計画・交通研究会の新たな潮流―流域・環境・モビリティのイノベーション	柳沼秀樹（東京理科大） 寺村隆男（清水建設） 武藤裕花（千葉大） 原 祐輔（東北大） 浦田淳司（筑波大）
9月	イブニング セミナー	情報利活用・セキュリティの現状と今後の展望	坂下哲也（日本情報経済社会推進協会） 和賀正光（国土交通省） 坂入 整（JR東日本）
12月	イブニング セミナー	生態系を活かした地域づくり：地域・企業が継続できる仕組み	正田 寛（パナソニック、前環境省） 吉田丈人（東京大） 橋本 純（清水建設） 浦嶋裕子（MS&AD インシュアランスグループ ホールディングス）

Opinion 資料編 オピニオン／視点 執筆一覧

年	月	テーマ	執筆者
2009	1月	空間情報のさらなる利用へ向けて	布施孝志(国土技術政策総合研究所)
	3月	自動車をより環境に配慮して使うために	浜岡秀勝(秋田大)
	5月	現代日本人が飢えているもの	中井 祐(東京大)
	7月	都市モデル研究の現状と今後	武藤慎一(山梨大)
	9月	次の時代に何を残すのか?	岸井隆幸(日本大)
	11月	土木ITS屋の生きる道	清水哲夫(東京大)
2010	1月	技術伝承に警鐘 誰に技術を伝承するのか	廣谷彰彦(オリエンタルコンサルタンツ)
	3月	アジアの成熟国としての日本	花岡伸也(東京工業大)
	5月	技術者の議論	栢原英郎(日本港湾協会)
	7月	新しい「この国のかたち」	平野勝也(東北大)
	9月	大学におけるプランニング教育とJABEE	福田大輔(東京工業大)
	11月	良い授業をやるために	寺部慎太郎(東京理科大)
2011	1月	生理的評価による街路のサービス水準の向上	谷下雅義(中央大)
	3月	常在戦場	堤 盛人(筑波大)
	5月	東日本大震災の復興政策	森地 茂(政策研究大学院大)
	7月	Civil engineering 市民工学への回帰	山本卓朗(鉄建建設)
	9月	志高き後輩たちへ	八方隆邦(東京急行電鉄)
	11月	航空ビッグバン	黒野匡彦(運輸政策研究機構)
2012	1月	日本の土木技術はグローバル競争に勝てるのか	富岡征一郎(鹿島建設)
	3月	震災復興と道州制を考える	稲村 肇(東北工業大)
	5月	行って、見て、聞いて、撮った 「スマトラ沖地震とインド洋大波から復興」	三武庸男(三菱地所)
	7月	構造物の大規模更新のあり方について	宮田年耕(首都高速道路)
	9月	東日本大震災の被害と今後の鉄道復旧について	林 康雄(東日本旅客鉄道)
	11月	いま改めて地球環境問題を	小野武彦(清水建設)
2013	1月	異常交通工学のすゝめ	朝倉康夫(東京工業大)
	3月	奈良県の県土マネジメントへの取り組み	大庭孝之(奈良県)
	5月	計画交通研究会に何を求めるか? ～「国土から学ぶ」人間社会の社会基盤～	家田 仁(東京大)
	7月	自ら学び開発した技術を ～建設コンサルタントの技術力の確保・向上と技術開発～	大島一哉(建設技術研究所)
	9月	忘れてはならないこと	古澤廣道(東武鉄道)
	11月	グローバル化時代の国土づくり	井上聰史(政策研究大学院大)
2014	1月	思考を停止するということ	藤井 聡(京都大)
	3月	将来世代へのレガシー(遺産)の創造	本多 均(三菱総合研究所)
	5月	「変わるもの」と「変わらぬもの」	木村洋行(大成建設)
	7月	住み継がれゆく郊外	林 一成(計量計画研究所)
	9月	東京オリンピック・パラリンピック開催に思う	入江健二(東京地下鉄)
	11月	残しながら、蘇らせながら、創っていく	小野澤康夫(三井不動産)
2015	1月	交通計画の新しい展開を期待	山川朝生(日本工営)
	3月	計画の失敗から何を学ぶのか	原田 昇(東京大)
	5月	道と車 =名神全通 50 年にあたって=	小室俊二(中日本高速道路)
	7月	計画の時代は去ったのか	高松 亨(水底質浄化技術協会)
	9月	30 年前のニューヨークから学ぶ事	茅野正恭(鹿島建設)
	11月	鉄道会社の地域連携 ～地域とともに目指す「住みたい沿線日本一」～	城石典明(東京急行電鉄)
2016	1月	PPP/PFI のより積極的な導入に向けて	宮本和明(東京都市大)
	3月	日本の活性化に向けて鉄道が果たす役割	中井雅彦(東日本旅客鉄道)
	5月	「美しさ」と「安全」と	廻 洋子(淑徳大)
	7月	新時代の国外業務対応に向けた技術者を養成する	廣谷彰彦(パンフィックコンサルタンツグループ)
	9月	首都圏の三環状道路の概成～ネットワーク活用の時代へ	遠藤元一(東日本高速道路)
	11月	日本の鉄道工事技術に思うこと	伊藤泰司(鉄建建設)

※所属と役職は当時のもの、敬称略

年	月	テーマ	執筆者
2017	1月	会長年頭ご挨拶	家田 仁 (政策研究大学院大)
	3月	企業のダイナミズム活用のための市場の開放	寺村隆男 (みずほ総合研究所)
	5月	創造の場としての計交研の価値	岩倉成志 (芝浦工業大)
	7月	働き方改革 (週休二日推進) について考える	杉原克郎 (清水建設)
	9月	地籍調査—いま何をなすべきか	清水英範 (東京大)
	11月	変化への適応リスクを超えて	屋井鉄雄 (東京工業大)
2018	1月	「三〇年」という時間	家田 仁 (政策研究大学院大)
	3月	アルジェリア東西高速道路工事を通じて感じたこと	田代民治 (鹿島建設)
	5月	新入学生を迎えて思うこと	寺部慎太郎 (東京理科大)
	7月	開港40年、世界最高水準の空港を目指して	夏目 誠 (成田国際空港)
	10月	土砂災害からの避難	水山高久 (政策研究大学院大)
	11月	景色を愛でる日本人の感性は何処へ	池邊このみ (千葉大)
2019	1月	海外インフラ展開に向けて 「内なる開国」と自らを「対視」する勇氣	家田 仁 (政策研究大学院大)
	5月	景観法から15年 —成果と限界 そしてこれから—	天野光一 (日本大)
	7月	災害列島に生きるということ—3.11 伝承ロードの取組	徳山日出男 (政策研究大学院大)
	9月	社会問題としてのモビリティ	青木真美 (同志社大)
	11月	自動運転時代における交通インフラのあり方	作中秀行 (日本工営)
2020	1月	危ないところはやはり危ない ～治水行政の意識転換を望む～	家田 仁 (政策研究大学院大)
	3月	交通整備プロジェクトのスピードアップをはかるには	山本卓朗 (未来のまち・交通・鉄道を構想するプラットフォーム)
		日本の悲観論を駆逐せよ	徳山日出男 (政策研究大学院大)
		観光研究のラビリンス	廻 洋子 (敬愛大)
		働き方改革と計画・交通研究会	岩倉成志 (芝浦工業大)
	5月	住み継がれるまちの実現	志村 健 (東武鉄道)
	7月	ウィズコロナの時代、倫理観とは何かについて考えてみました	藤原章正 (広島大)
	9月	コロナ禍における大学教育のゆくえ	金子雄一郎 (日本大)
	11月	Beyond コロナ時代の新たなモビリティサービスと社会インフラ	牧村和彦 (計量計画研究所)
2021	1月	災害に向き合う地域の意思と責任	家田 仁 (政策研究大学院大)
	3月	インフラ事業の多様な効果をどのように評価するか？	朝日ちさと (東京都立大)
	5月	激変する時代の中で国土と都市を考える場に	羽藤英二 (東京大)
	7月	移動への想い	岩倉成志 (芝浦工業大)
	9月	オリンピック・レガシー	松崎 薫 (東日本高速道路)
	11月	新たな価値を生む“バウンダリースパナ”の育成と活用	大串葉子 (相山女学園大)
2022	3月	脱炭素社会への道のり	福士謙介 (東京大)
	5月	再びの万国博覧会	山谷佳之 (関西エアポート)
	7月	「新3K」への道程	上西泰輔 (大林組)
	9月	鉄道開業150周年にあたって —今後鉄道の果たすべき役割—	林 康雄 (鉄建建設)
	11月	親の死に目と国土	加藤浩徳 (東京大)
2023	1月	空飛ぶクルマとイノベーション	中野 冠 (慶応義塾大)
	3月	震災と日本文学 —関東大震災100年—	茶木 環 (作家／エッセイスト)
	5月	GPT時代の学会の価値とは？	福田大輔 (東京大)
	7月	夏本番。安全な川とのふれあいを。	知花武佳 (政策研究大学院大)
	9月	私たちは何を食べるのか？	真田純子 (東京工業大)
	11月	景観設計からデザインへ	佐々木葉 (早稲田大)
2024	1月	関西のプロジェクトの状況と広域地方計画策定に向けて —関西のまちと交通、その未来	見坂茂範 (国土交通省)
	3月	能登半島地震報告	羽藤英二 (東京大)
	5月	都市探訪の途上	伊藤香織 (東京理科大)

Member

資料編

会員一覧

法人正会員(15社)

会社名
(株)大林組
小田急電鉄(株)
鹿島建設(株)
管清工業(株)
京王電鉄(株)
清水建設(株)
大成建設(株)
鉄建建設(株)
東急電鉄(株)
東京地下鉄(株)
東武鉄道(株)
東日本旅客鉄道(株)
みずほリサーチ&テクノロジーズ(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)

個人会員(124人)

大学関係者、官公庁、コンサルタント、研究機関など

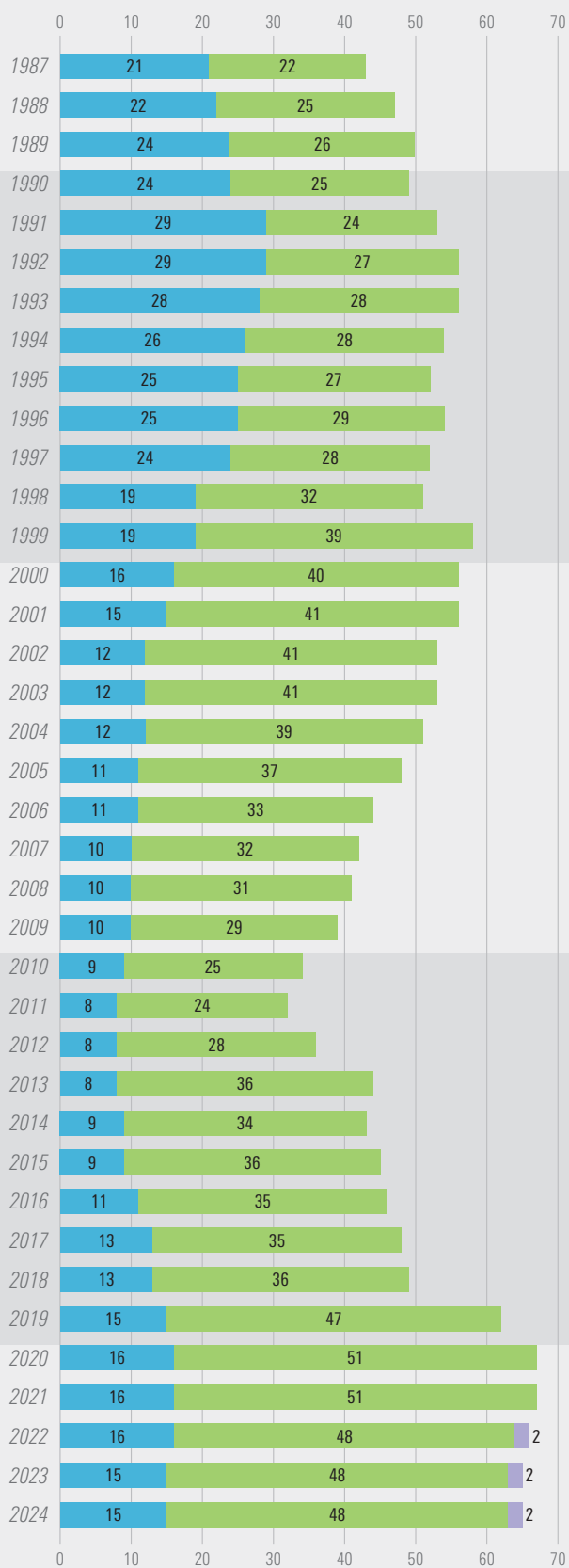
法人賛助会員(50社)

会社名
(株)安藤・間
いであ(株)
(一財)運輸総合研究所
(株)オオバ
(株)奥村組
(株)オリエンタルコンサルタンツ
関西エアポート(株)
(株)熊谷組
京浜急行電鉄(株)
(一財)計量計画研究所
(株)建設技術研究所
国際興業(株)
五洋建設(株)
(株)サーベイリサーチセンター
JR東日本コンサルタンツ(株)
社会システム(株)
首都高速道路(株)
新関西国際空港(株)
大成エンジニアリング(株)
大日本コンサルタント(株)
(株)中央建設コンサルタント
東海旅客鉄道(株)
東急建設(株)
(株)東急設計コンサルタント
東急バス(株)
(株)東京建設コンサルタント
(株)ドーコン
東電タウンプランニング(株) 地域開発カンパニー
中日本高速道路(株)
成田国際空港(株)
西松建設(株)
日本貨物鉄道(株)
日本工営(株)
日本コンサルタンツ(株)
(一社)日本鉄道施設協会
(一社)日本プロジェクト産業協議会
(一財)日本みち研究所
(株)ネクスコ東日本エンジニアリング
パシフィックコンサルタンツ(株)
東日本高速道路(株)
(株)福山コンサルタント
(株)復建エンジニアリング
三井共同建設コンサルタント(株)
三井不動産エンジニアリング(株)
(株)三菱総合研究所
みらい建設工業(株)
(一社)未来のまち・交通・鉄道を構想するプラットフォーム
メトロ開発(株)
森ビル(株)
(株)ライテック

[2024年5月31日現在]

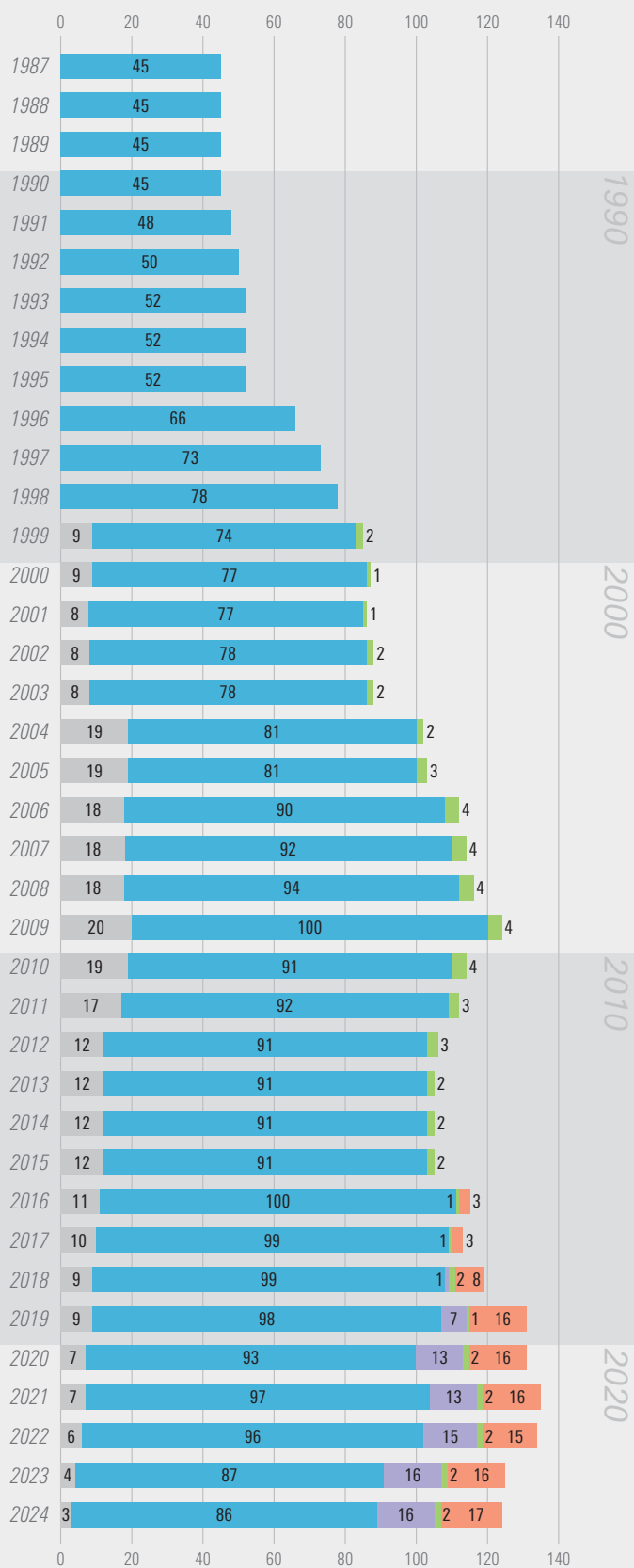
Transition

法人会員数の推移



法人会員 法人賛助会員 遠隔地法人会員

個人会員数の推移



フェロー会員 個人正会員 遠隔地個人会員 個人賛助会員 若手研究者会員

Member

資料編

役員等の体制

特別顧問、理事・監事以外は五十音順

役職	氏名
特別顧問	中村英夫
特別顧問	森地 茂
特別顧問	石田東生
特別顧問	家田 仁
代表理事・会長・企画委員長	羽藤英二
理事・会長代理・経営委員長	岩倉成志
理事・広報委員長	茶木 環
理事・幹事会顧問	金子雄一郎
理事・事務局長	白木原隆雄
理事	伊藤香織
理事	寺部慎太郎
理事	徳山日出男
監事	福田 敦
監事	上西泰輔
評議員	青木真美
評議員	朝倉康夫
評議員	浅輪宇充
評議員	天野光一
評議員	雨宮克也
評議員	伊東 誠
評議員	伊藤泰司
評議員	井上俊幸
評議員	上西泰輔
評議員	王尾英明
評議員	大石敬司
評議員	大串葉子
評議員	小山 宏
評議員	片岡 潔
評議員	窪田陽一
評議員	坂本好謙
評議員	作中秀行
評議員	志村 健
評議員	城石文明
評議員	鈴木啓史
評議員	田村 亨
評議員	中村文彦
評議員	林 康雄
評議員	林 良嗣
評議員	原田 昇
評議員	兵藤哲朗
評議員	廣谷彰彦
評議員	藤井 聡
評議員	前田信幸
評議員	松井保幸
評議員	廻 洋子
評議員	毛利雄一
評議員	良峰 透
事務局	
事務局長	白木原隆雄
経営委員会	
委員長	岩倉成志
委員	雨宮克也
委員	関 聡史
委員	徳山日出男
委員	松井保幸
委員	利穂吉彦

役職	氏名
企画委員会	
委員長	羽藤英二
委員	阿部 功
委員	石坂哲宏
委員	伊藤香織
委員	王尾英明
委員	小野寺博
委員	寺部慎太郎
委員	布施孝志
委員	三島大輔
委員	柳沼秀樹
広報委員会	
委員長	茶木 環
幹事長	奥田 豊
副幹事長	貴志法晃
副幹事長	辻 功太
設立50年特別号編集長	梶谷俊夫
委員	伊藤香織
委員	内海克哉
委員	大高枝里
委員	小川拓弥
委員	古宇田剛史
委員	柴崎隆一
委員	高瀬太郎
委員	高山滉平
委員	知花武佳
委員	中村裕史
委員	新田直司
委員	原 祐輔
委員(HP管理グループ長)	福田大輔
委員(写真・映像)	小野田麻里
学生委員	須賀理帆
学生委員	萩原啓太
学生委員	古林 陸
学生委員	八木龍聖
HP管理グループ	柳沼秀樹
紙面デザイナー	新目 忍
幹事会	
幹事長	柳沼秀樹
副幹事長	石坂哲宏
幹事	園部雅史
幹事	田中皓介
顧問	金子雄一郎
産学共働若手勉強会	
主査	金子雄一郎
副査	日比野直彦
留学生インフラセミナー運営委員会	
委員長	金子雄一郎
委員	大沢昌玄
委員	知花武佳
委員	森川 想
委員兼幹事	石坂哲宏
委員兼幹事	柳沼秀樹
顧問	家田 仁
顧問	小澤一雅
顧問	加藤浩徳
顧問	羽藤英二
事務局	白木原隆雄

[2024年6月30日現在]

Information | お知らせ

第1回 都市の発展を支えてきた鉄道の技術革新 ～これまでの50年とこれからの50年～

イブニング
セミナー

●日 時 2024年7月16日(火) 16:30～18:45

●形 式 ハイブリッドセミナー

(参集型とオンラインの同時開催)を予定

●プログラム

司会進行：金子雄一郎 日本大学 理工学部 土木工学科 教授
(当会理事)

第一部 話題提供「50年の都市鉄道の変化～技術面を中心に～」

話題提供者：三島大輔 東日本旅客鉄道株式会社 建設工事事
ユニットリーダー(企画)

コメントータ：岩倉成志 芝浦工業大学 工学部 土木工学課程
教授

第二部 ミニ討論「これからの鉄道とそれを支える技術の展望 ～サステナブルな鉄道へ～」

発表者：伊東 寛 東日本旅客鉄道株式会社 建設工事事
マネージャー(大規模開発プロジェクト)

今村憲司 東武鉄道株式会社 鉄道事業本部 事業戦略部 課長

横尾俊介 東急電鉄株式会社 広報・マーケティング部 CX・
マーケティング課長

大槻裕毅 東京地下鉄株式会社 鉄道本部 鉄道統括部 計画課長

●場 所 東京大学本郷キャンパス工学部2号館211講義室

2024年度 秋の見学会

見学会

●日 程 2024年10月22日(火)～23日(水) 1泊2日

●見学先 足羽川ダム建設現場、越前市五箇地区、敦賀、
福井県年輪博物館、小浜の街並み等

編集後記

50周年記念誌をお読みいただき、ありがとうございます。

会社に入社後、若手の頃から、これまで計交研のイブニングセミナーや見学会等に参加して
おりましたが、昨年度から当研究会の広報委員となり、本記念誌の編集長を今回担当させて
いただくこととなりました。

編集に関わるなか、50周年という大きな節目を迎えるほど、当研究会が長期間継続されてき
たのは、八十島会長のご尽力、各歴代会長のリーダーシップ、そして、当研究会の運営や参
加している大学関係者と民間事業者との間で、とても良い関係が構築され、固い結束が生ま
れる組織風土があるからではないかと感じました。

これからも、時代に先駆ける、企画・イベントの実施や、有益な記事が発刊され、多くの方
が参加・交流し、より良い未来につながる場として継続されることを願います。

最後になりますが、本記念誌の発刊にあたり、座談会にご登壇いただきましたみなさま、寄
稿していただきました法人会員のみなさま、茶木広報委員長、各記事の編集作業を行って
いただきました広報委員のみなさまに改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回、50周年記念HPを担当させていただき、歴代会長のお話を伺う機会や過去の会報誌の
取りまとめを通じ、先人の方々の高い視点、広い視野、深い考えに触れることができ、個人
的にも大変貴重な機会をいただくことができました。

少しでも早く皆様にもご覧いただけるよう、対談動画の編集や過去の会報誌の整理などを進
めておりますので、楽しみにお待ちください。

また、過去の会報誌の取りまとめにあたり、多くの方に資料提供等のご協力をいただきまし
た。この場をお借りしましてお礼申し上げます。

副編集長として50周年記念HPの作成に携わらせていただき、私が土木を志す前の時代から
脈々と受け継がれてきた会報誌を拝読したり、普段は直接お話しする機会の少ない歴代会長の
当研究会ひいてはインフラ整備にかける熱い想いを伺うことができました。改めて、多くの
先人の方々が築いた基盤の上に立たせていただいているということを実感し、身が引き締ま
る思いです。

HPの完成まであとわずかとなりましたが、本HPが皆さまにとって有意義なものとなるよ
う、コンテンツの整理を進めて参りますので、是非ご覧いただければと思います。



東急電鉄株式会社
梶谷俊夫 (広報委員)



東日本高速道路株式会社
辻 功太 (広報委員)



清水建設株式会社
古宇田剛史 (広報委員)

[目次] Contents

02	歴代会長が牽引し、つないできた50年 ご挨拶	第6代会長 羽藤英二
04	[座談会—1] 地域と文化	
	國學院大學 観光まちづくり学部長 西村幸夫	東京藝術大学 准教授・アートプロデューサー 相馬千秋
	司会 東京理科大学 教授 伊藤香織	
	文責 作家／エッセイスト 茶木 環 東日本旅客鉄道 貴志法晃	
09	[座談会—2] 歴代幹事による座談会	
	東京理科大学 教授 寺部慎太郎	日本大学 教授 金子雄一郎
	東日本旅客鉄道株式会社 建設工事業 企画ユニットリーダー 下大蘭浩	清水建設株式会社 土木営業本部 副本部長 王尾英明
	司会 東京理科大学 准教授 柳沼秀樹	計画・交通研究会 事務局長 白木原隆雄
	文責 東急電鉄 梶谷俊夫 東武鉄道 高山滉平	
14	法人正会員[寄稿]	
	株式会社大林組／小田急電鉄株式会社／鹿島建設株式会社／管清工業株式会社 京王電鉄株式会社／清水建設株式会社／大成建設株式会社／鉄建建設株式会社 東急電鉄株式会社／東京地下鉄株式会社／東武鉄道株式会社／東日本旅客鉄道株式会社 みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社／三井不動産株式会社／三菱地所株式会社	
22	資料編 社団法人化以降の歩み	
	- 現在の活動状況	
24	- 社団法人化以降15年間の見学会	
26	- 社団法人化以降15年間のセミナー一覧	
34	- オピニオン／視点 執筆一覧	
36	- 会員一覧	
38	- 役員等の体制	
39	お知らせ／編集後記	